

IFx57

332-157  
332-157

科  
學  
と  
人  
生

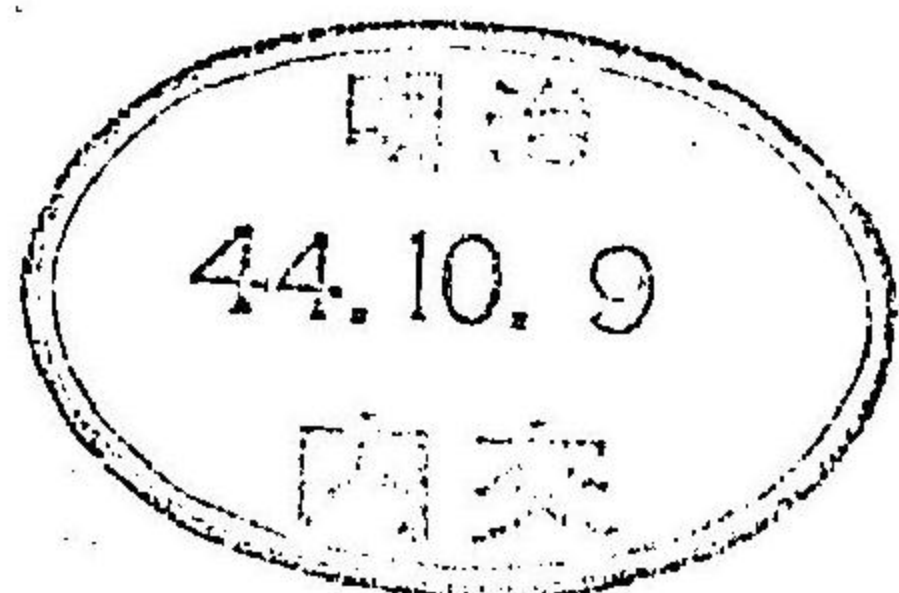




柳宗悅著

科學と人生

物山書店





吾が一人なる母上に





目 次

序言	IX
新らしき科學	一
マチニコフの科學的的人生觀	一三三
追補	三二七



## 序言

死とは何を意味するのであらうか、古りたる此の人生の謎に自分は今尙迷ひつゝある一人である、古くより此問は幾度か發せられ幾度か答へられてある、殘された多くの聖典教條を別としても、近世に於てかのインガソールの講座 (The Ingersoll Lectureship) から放たれた不死に關する議論も既に數多くなつてゐる、然し人はいつの日か之に對する満足な答を得るのであらう、哀れなる自分は未だ常に花笑ひ鳥歌ふ彼岸の淨土を信じるの術を知らない、然も尙自分は死の前に立つて人生を呪ふの心に安ずるの理を知らない、此疑問を解く可きものは、所詮は信仰の力のみであらうか、理智の文化に生ひ立つた自分は、古へ



の教へをその儘に信じるには餘りに敏くある、然も知識を棄て、神祕の教へに遁れんには、自分の努力は未だ貧しくある、かゝる自分にとつて科學は常に鋭い力であつた、多くの人々は科學が人生の根本問題に觸れ得べき力のないのを嘲つて云ふ、然し自分にとつて眞の科學とは最後の目的を此人生の上におく可きものである、宗教と哲學と科學と、此三つのもは自分には何等明かな區劃がない、等しく宇宙人生の問題を解く可き人類の同じ努力に外ならない、互に之を誇り排するの愚は自分の關はらざる所である。

然も日輪に神の榮光を認め、雷鳴にその忿怒を感じ、あらゆる自然の移變に活ける力を味つた古き民の信仰が去つた今日、再び自然に驚嘆するの喜を甦らしめたものは科學ではあるまいか、眞夜空を仰いで日星の運行に一糸亂れざる

天の法則を感ずるの悦びは、啓發せられたる知識の賜物である、野に棄てられたる一個の石にも天の攝理の深く刻まれてある事は、進みたる科學の益々明にする所である、今の吾々に再び宗教的經驗を與ふるものがあるなら、それは科學によつて立證せられたる宇宙の神祕である、自分には偉大なる科學者は常に偉大なる宗教家の如く思へる、自然の法則を叙述せる科學の書籍は又自然の聖典ではあるまいか、嘗て母費—學習院—の圖書館で、一人初夏の風にふかれながら窓に寄つて電氣物質論を繙いたことがある、頁を追ふてメンデレーフ(Mendeleeff)の物質元素に關する週期律の法則(The Periodic Law)に達した時、自分は思はずも自然に潛む啓示に襲はれて、此喜ばしき經驗を心より感じた事は今も尙忘れない處である、「自然の裡に深く入れよ、音樂は至る處にあり」とは



カライルの言葉である、今自然の裡に妙な韻律を見出しつゝあるものは科學ではあるまいか、それを唯物の一面に限つて卑しきものとするのは誤りである。

自分はかゝる求めによつて又死に對する答を科學に訪ねたのである、此處に納めた二つの解釋は、かゝる道で摘み得た二つの美はしい花である、多くの讀者の内には其香を慕ひ其色を喜ぶ人のあるのを思つて、未だそれを知らざる人々の爲に、此二もとの花を捧げるのである、科學者ならざる自分はもとより精細な學術的敘述をなし得ないのである、只専門家ならざる一般の人々に、顧みられざる科學の興味を起すを得、新なる人生の問題に觸れるのつてにもなつたらば自分にはあり餘る酬むのである。

然し自分はかゝるものを公にする事を臆せざるを得ない、自分の手によつて

XII

其花の傷けられたのを知り、又其美はしき花を手にする爲に、自分自らが早くから人に知られるのをいやに思ふからである、若し自分に白樺同人諸兄が無かつたら、自分は此論文を書き又之を公にする機會も勇氣も與へられなかつた事と思ふ。

—千九百十一年九月二十六日—

柳 宗 悦

XIII



新らしき科學



目次

緒言

一 精神感應と透視力

一 感覺の轉位

二 精神感應

三 透視力

四 豫覺

五 要言

二 自働記述と生命の殘存

一 バイバー夫人に関する實驗

二 同一人格

三 媒介者の働き

四 狂者と天才

三 心靈の物理的現象

一 パラディノール夫人に関する實驗 其の一

二 パラディノール夫人に関する實驗 其の二

三 パラディノール夫人に関する實驗 其の三



#### 四 妖怪現象

一 幽霊

二 精霊寫眞

三 幽霊屋敷

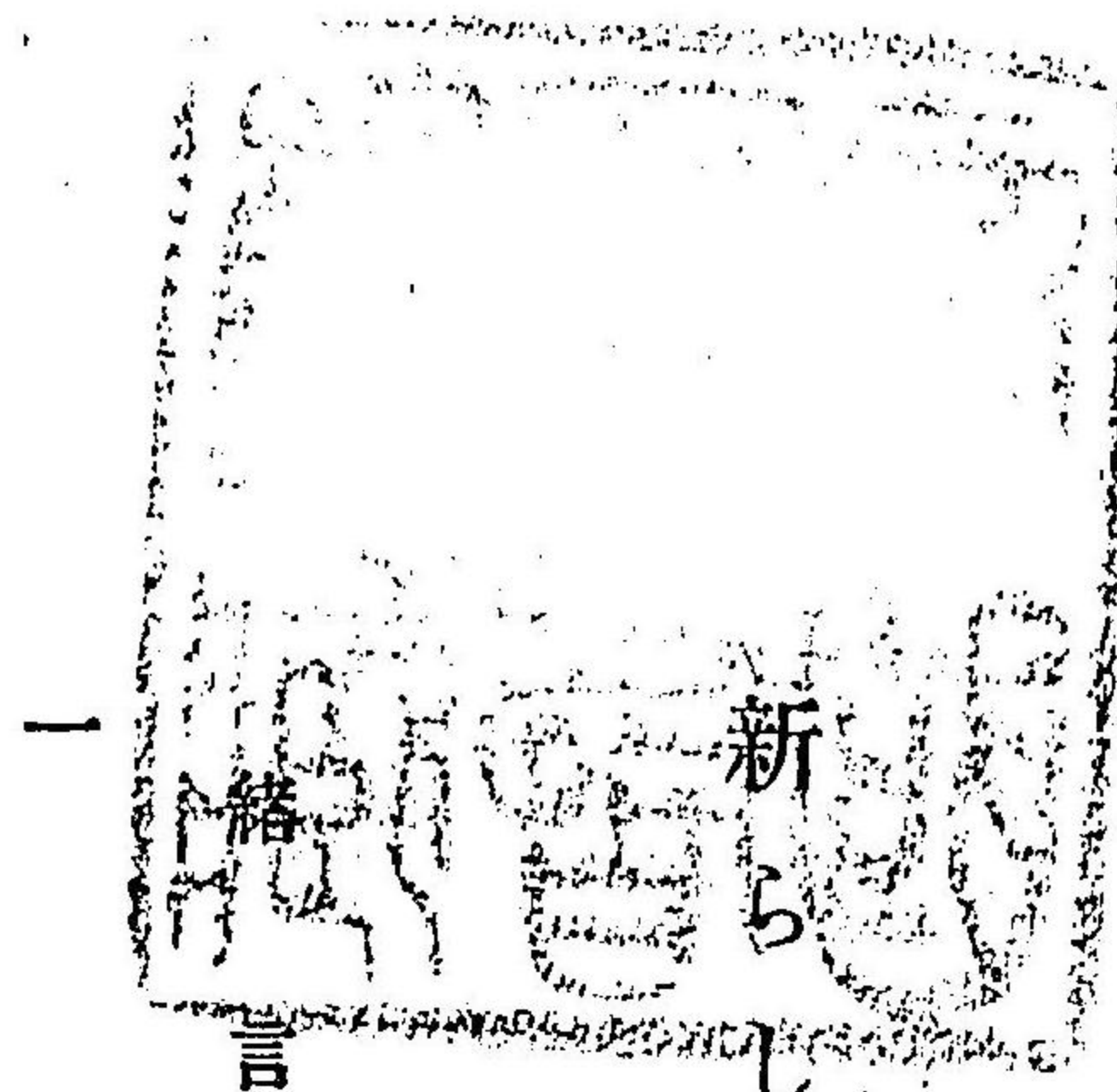
#### 五 結論

一 來世の存在

二 心霊と物質

三 物質に對する最近の科學的見解

四 科學的唯心論



### 新らしき科學

緒言

自分の思惟する處に従へば近き將來に於て吾人が人生觀上に影響す可き科學が三つある。それは生物學に於ける人性の研究と、物理學に於ける電氣物質論と、變體心理學に於ける心霊現象の攻究とである。「人間とは何ぞや」の問に答へん



とするものは第一の科學である、將來の道德が此研究によりて開拓せらるゝ事  
多きは自分の信ずる處である。「物質とは何ぞや」の質問に向つて解答を與へん  
とするものは第二の科學である、電子及エーテルに關する研究は恐らくは此謎  
を解く可き唯一の鍵鑰であらう。而して「心靈とは何ぞや」の問題に對して解決  
を下さんとするものは第三の科學である、自分は此小論文に於て最後の科學即  
ち心靈現象に關する最近の研究を世に紹介したいと思ふのである。

二

宗教と道德との權威が地に墜ちたる今日、思想に飢えたる吾等にとりて大なる  
力を有するものは科學である、若し吾等理智の文明に育ちたる民に再び人生  
の神祕を明かに語り得るものがあるならば、それは古き信仰に非ずして新しき科

學である。げに反抗を以て起ちたる過去の科學は、自己の天職を忘れつゝ、人生  
が凡ての不可思議なる事實を只迷信なりとして笑ひ去つた、然し科學が發展と  
は即ち宇宙の神祕が開發を意味するものである、こゝに於て科學は單なる科學  
ではない、彼が關はる所は哲學、宗教と同一のものである、而して恐らくは將  
來に於て人の信仰の基礎を形造るものはかゝる科學であらう、宇宙が一絲亂れ  
ざる法則の内に調和しつゝある事を吾人に確信せしむるものは、今や獨斷的な  
る信條に非ずして、それは明かに科學ではあるまいか、宗教は常に吾人が永生を  
稱へんとして居る、然も此信仰の失はれたる今日、吾人が死後尙存在すべき事  
を證明せんとするものは、今自分が晝かんと欲する新しき科學ではないか、古  
りたる世よりの謎なりし「心靈」の問ひに答へ、幾度か人の子が迷ひたる死後の



問題に解決を試みんとする此心靈現象の攻究とはそも如何なるものであらうか、自分は之より拙き筆を進めて之を書いてみたいと思ふ。

三

英京倫敦に於て心靈現象研究會 (Society for Psychical Research) が設立せられたのは今から二十八年前、即ち千八百八十二年二月の事である、主として精神感應、透視力、自働記述及妖怪等の實證に基き、吾人が變態に屬する心理作用を攻究せんとするのである、此會の創立者には詩人マイアース (E. W. H. Myers) あり、倫理學者シチキック (H. Sidgwick) 夫妻あり、心理學者としてはガーニー (E. Gurney) バレット (W. F. Barrett) ステewart (B. Stewart) 等があつた、シチキックは其最初の會長である、雜誌 "Proceedings" は今尙續刊して

此研究の結果を發表して居る。

もとより此年若き科學は未だ發達の初步にあるが、恐らくは最も多忙なる未來を有せるものである、今や科學が宗教哲學と互に相觸るゝの日に當つて、乾燥せる舊思情に厭きたる吾等に、人生が別種の真相を齎すものは恐らくは此新しき科學であらう、ロッヂが「マイアースを想ふ」の溫き一文に彼が遺著「人格と、それが死後の存在」(Human Personality and its Survival of Bodily Death) を「劃世の書」と呼びキングスランドがそれをダルクソンの「種の起原」に比す可き書と云つたのは宜なる事である、今や多くの大なる科學者は此研究に向つて深き注意を拂つて居る、特に此科學に貢獻せる人の内には、かの現代一流の心理學者たるジェームス (W. James) がある、有名なる刑事法學者としてはロムブロー



ゾー (C. Lombroso) がある、最も著名なる生物學者としてウォーレン (A. R. Wallace) がある、物理學の歴史に忘る可からざるクルックス (Sir W. Crookes) 及ロッチ (Sir O. Lodge) がある、生理學者としては佛にリシュー (C. Richet) があり、天文學者としてフラムマリオン (C. Flammarion) がある、其他心理學者として秀でたる人にはヒスローブ (J. Hyslop) オチン (R. Hodgson) ホッドモアー (Podmore) キャリンダマン (H. Carrington) アクサロフ (Aksakoff) 等がある、又詩人テニンソン (A. Tennyson) も其内に數へらる可き人である。而して前記のマイアースの著書の外、自分の知れる範圍に於ても是等の人々が著はせる書は數多あるが、此處には此研究の最近の結果を代表せる著として殊に二つの書を選んで此新しき科學を紹介しようと思ふ。

10

#### 四

特に刑事法學者として近世の最大なる科學者の一人に數へらる可きかのチェザレ、ロムブローゾー (Cesare Lombroso 1836-1909) が其逝ける前年、最後の著として心霊現象の研究に基ける人生觀を發表せんとした、其時多くの彼が知友は「理性の上にて起てる科學者が神祕の前に跪ける」を嘆じ、かくて彼が七十有餘年の榮譽ある生涯の歴史が毀損せらる可きを説いて此舉に反對した。然しロムブローゾーの確信は是等凡ての反抗を退けて遂に千九百〇八年十月テューロンに於て一書を發行した、「死後、とは何ぞや」"After Death-What?" とは彼が其書に與へたる名である。

11

英のサー、オリヴァー、ロッチ (Sir Oliver Lodge 1851-) は現代一流の物



理學者である、彼が電氣學に貢獻せる創始ある卓見は正に故國の誇りともすべ  
きものである、然れども彼が單なる一個の科學者に非ずして、如何に人生に對  
して深遠なる見解を有せるかは彼が幾多の宗教に關する著書の示す處である、  
のみならず特に科學者たる彼が、人間の生命が死後尙永續せらる可き宿論は今  
や廣く世に知られて居る、而して彼は昨年暮、此確信に對する科學的研究の  
結果を發表した、「人命の殘存」(The Survival of Man)とは即ち其書である、  
自分は主として今此二書を通じて、此新しき科學の梗概を叙述しようとするの  
である。

12

#### 一 精神感應と透視力

#### 一 感覺の轉位 (Transposition of the Senses)

今此科學の世に供給し得るものは豊富なる實例と實驗とである、理論は其割  
に比して甚だ不充分であるが未だ日尙淺き此科學にとりて、それは止み難き傾向  
である、然し吾等によりて須要なるものは寧ろ事實である、而して特に實驗的  
事實は此科學に對して大なる價値の存する處と信じる、自分が此小篇の大部分  
も實例であるが、數多き中より興味あるものを選んだつもりである。

13

抑も、人間の驚く可き心靈の現象が主として異常なる生理狀態例へばヒステ  
リア、睡遊等の折に現はれる事は著しき事實である、特に精神感應、透視力に  
て説明す可き趣味ある心靈現象は甚だ多いが自分は先づ感覺の轉位に關する實  
例より筆を起したいと思ふ。



嘗て伊太利に十四になる女の子が居た、名ある人の娘であるが不幸にも病を得て甚しいヒステリアに陥り遂に視力をさへ失つてしまつた、彼女には様々な習癖が現はれたが特に奇異な事は彼女の鼻の先と、左の耳朶とは、よく眼に代つて物を見分けるのである、盲目なる彼女はかくて手紙を読み繪を眺める、然し此不思議なる感覺の移動は常に視覺にのみ止まらずして嗅覺さへ其位置を變へた、始め彼女の願は鼻に代つて香を嗅ぎわけたが程へて嗅覺は更に足の裏に轉じた、此女は又よく未來の事を豫知し自分には何日に痙攣の發作があると云ふ事を豫言するが、いつも事實と符合するのである。

同じ年頃の女の子に月經が始まる頃はひから激しきヒステリアに罹つた者が居た、彼女は病氣の發作中は、よく手を以て物を識別し暗室に於てすら色を見

分けたと云ふ、彼女が自分の顔を見ようと思ふ時鏡はいらぬ、只自身の手をさへ見ればいゝ、又或女は睡遊 (Somnambulism) の状態になると頸背で物を判別した、彼女の嗅覺は手の甲に移り後には上腹部にさへ轉じた、又エステラと云ふ七つになる小供は、聽覺が手や肩や肘に迄位置を變えた、かゝる變態を如何にして説明すべきかは未決の問題であるが、サルヴィオリ (Salvioli) の考察によればヒステリア、睡遊の折は、普通の生理状態に於てよりも血液の循環が甚しく、従つて筋肉や精神の活動が強度を以て増すのだと云つて居る。

## 二 精神感應 (Telepathy. Thought-Transference)

精神感應とは或人に起れる事が所謂五官の媒介なくして他の人の心に印象するのを云ふのである、複雑なる心象を此範疇にのみ入れて説明する事は困難で



あるが次の様なものは先づ其實例の二三である。

伊太利のノセラと云ふ處に二十歳になる青年が居た、若き折の失戀の結果ヒステリアに陥つて奇異な習癖を生じる様になつた、彼は他人の心に浮ぶ文字や數字をよく的てる、殊に彼の目を蔽ふて後方で他人が畫をかく時はすぐに之れを模寫する、實驗した畫を比較すると其形こそ正格ではないが殆ど的つて居る圓や正方形の如き簡單なる圖は容易である、中には Andrea と云ふ様な字を、まるで習字でもする様に、筆法迄丁寧に眞似してゐる。又英國にレルフと云ふ女の人が居た、彼女は遠くに隔て、匿されたる物をよく識別する、或試験で劍を彼女の後方にあるカーテンの中に匿して聞くと、こう答へた、「何か光つて居ます、銀か鐵でしょう、長くて細いものです」。又トラムプのハートの三を匿す

と「赤い點が二つある、いやハートの三です、まあそれに似よつたものらしい」と答へる、時としては答の正格でない場合もあるが兎も角單に視覺を以て見えざるものを知覺るのである、以上の如き實驗はガスリー(M. Guthrie)やハーダマン(Herdman)が面白い實例を澤山擧げてゐる、こゝに注意す可きは受覺者の心理状態によつて非常に結果のよい時と悪い時とがある、然し半バの時が殆どない事である。

又精神感應の實例として次の様な事が報じられてゐる、マイルスとラムスデーンと云ふ二人の婦人が居た、此實驗を行はんが爲に二人で遠く隔たつた處に於て互に精神的交通をする事を約した、千九百〇五年に前者はロンドンに居、後者はバッキンガムシャーに居て一方が問を發する能動者(Agent)となり他方が



之に應答する受覺者 (Perceptant) となつて愈々試験を行つた、日々相互に感應する問と答へとを各自記載して後に比べて見たが殆ど彼等の心に印象せる記事は符合して居た、其後度々兩婦人は試験をして居たが、中には當時の周圍の情況まで、こまやかに記載してあるものさへあつた。

千八百八十三年にセヴァーン夫妻が三年程前に起つた事件を報告した事がある、或朝夫人が床について居る時突然何者にかに口をひどく撲られたので驚いて起きた、明らかに上唇の傷口から血が滴るのでハンケチでおさえて暫く床の上に座つて居た、程へてハンケチを取つて見ると如何なるわけか血の跡すらない、不思議に思ひ乍らも夢なのだと思ひ返して再び床に就いた、時刻は丁度七時であつた、夫のアーサーは湖水に舟を漕ぎに出たものと見えて既に室には居

なかつた、朝食の時になつて夫は歸つて來た、共に食事をしてると夫は頻りに唇をハンケチでおさえて居る、妙だと思つて夫人が尋ねると今朝風の爲に舵の柄が煽つて口をひどく撲つた爲大變出血したと云ふ、時間を尋ねると多分七時頃だつたと答へた、夫に起つた災禍が同時刻に處を隔てた夫人に感應する事は不思議なる事實と云はねばならぬ。

### 三 透視力 (Clairvoyance)

吾人の視覺を以て見る能はざるものを認識することを透視力と云つて居る、實例にうつらう。

或朝バッキーと云ふ夫人が獨りで茶をこしらえて居た、夫は既に外出し小供も學校に行つてしまつた後である、所が當時舟に乗つて居る彼女の弟が突然前



に現はれた、後姿であつたが急に前に倒れる様子である、足を見ると綱が絡まつてゐる、かくて瞬間の内に此シーンは消へたが程なく電報で其弟が溺死したと知らせて来た、詳細を尋ねると死んだ當時の有様は夫人の見た幻の如く彼は曳綱の爲に舟から落ちて溺死したのである。

南亞非利加に或紳士が居た、或朝彼の下僕のアルバートが来て告げるには、彼の母が今朝死んで床に横はつて居る姿を見たと言ふ、且つ其時母が「二度と我子を死ぬ迄に見ない」と云ふ言葉を残して死んだと云ふ事迄告げた、彼は之を聞いて、單にそれを一偏の妄想に過ぎないと云つて笑つてゐたが程へてから遠國に居る彼の妻から母の死を報知し、且つ「死ぬ迄に再びアルバートの顔を見る事は出来まい」と云つたのが臨終の言葉だつたと書いて来た、不思議なるアル

バートの見し幻は不幸なる事實となつたのである。

同じ様な例は今から二十八年前フロレンスの劇場で起つて居る、夜の十時半頃である、見物してた一夫人が急にお父さんが今死んだと云ひ出して半にして席を立つてしまつた、家に着くや否やテューリンから電報で父の危篤を知らせて来たが遂に第二の電報で父が其夜十時半に死んだと云ふ事がわかつた。

更に驚く可き靈視力の實例がある、シカゴ市にロガンソンと云ふ十九歳になる娘が居た、或夜彼女はシカゴから五十哩も離れたるマレンゴーに百姓をして居る弟のオスカーが暗殺されたシーンを細かに夢みた、夢にしては餘りに印象が明らかなので電報を打つて尋ねると返電が来てオスカーが見えぬと云ふ、そこですぐ他の兄弟や巡査と共にマレンゴーに向つて出發した、然し彼女は、弟



の家には行かずして直接にベッドフォールドと云ふ人の家に一同を導いた、家は鍵がかつてるので、むりに開けて入ると臺所に明らかに血の痕がある、彼女は更に皆んなを家から少し離れてる鳥小屋に案内して「此中に自分の弟が埋めてある」と云ふ、巡査は不審に思ひながらも掘つて見ると果して死骸が出て来た、加害者のベッドフォールドは之が爲に事が發覺して拘引されてしまつた、ロガンソンは自分で此事實の説明が出来ないが只連夜弟の亡魂が自分を襲ふたと云ふて居る。

22

今迄の例は、實際に起つた例であるが、こん度は實驗的實例の著しきものを舉げて見よう、ステイントン、モーゼス (Stanton Moses) は多年ロンドンの大學豫科の校長として有名な人であるが、彼は靜なる朝、常に所謂「自働記述」を練習して居つた、其實験の例は甚だ多くなつて居るが嘗てスピアー教授の書齋で行つたもので特に奇異な實例がある、彼はもとより他人の書齋に如何なる本があるかは知らないが次の様な問を出した。

「本箱の第二の棚の終りから一番目の本の九十四ページの最後の章を讀む事が出来るか」

しばらくして昏睡に陥りつゝ、彼が手は次の文章を書き出した。

「吾れは短かき歴史的説話によりて、かの天主教が新奇なるものなりし事を略述せむ、そは純なりし原始基督教時代より、おもむろに起り榮えたるものなりき、さなりそは只に使徒時代よりのみならず、コンスタンティン帝によりてなされたる教會及國家の悲しむ可き締結の日よりなりき」

23



かく讀み了へたので原書と比較すると符契を合するが如くに合つて居る、只記事 (Account) とある可きを説話と (Narrative) 云つたのが一字の誤りのみであつた。

其他、何者かの力が無意識中に働く例としてプランセット (Planchette) の實例を一つ舉げて見たい。プランセットが色々の働きをする事はよく知れて居るがスミス夫人のした實例によると、或時彼女は心臟形に切つてあるプランセットの曲線の方程式を書いてくれと云ふ事を要求した、かなりの數學者でも、すぐ形を見て其方程式を出す事は困難であるがプランセットは、直ちに  $y = \sin \theta$  と云ふ方程式を書いた、スミス夫人の言葉によれば彼女は、もとよりかゝる方程式を知つてはゐない、従つて此答は自身の記憶が働いたものと云へない、後

に此答によつて圖を書くとき明らかにハート形である、ロッチの言に従へば若し誤つて  $y = \sin \theta$  となつて居たら大變に違つた形が出来ると云つて居る、然も微細な此數學的計算を誤りなく出したのは驚く可き事實と云はねばならぬ。」

#### 四 豫 覺 (Premonition)

如上の實例は同時に起りたる事件を感應せる場合であるが未來の事を豫覺する事は出来ないであらうか、事實は之に反して次の様な例を持つて居る。

とある夫人が十歳になる小供をつれてトッリニティーの海岸に暑を避けた事がある、或日小供は常の如く鐵道のレールに近い、いつもの海岸に遊びに出た、處が急に母の耳に「小供を早く家につれて歸らないと大變な事が起る」と囁く者がある、母は驚いて乳母を迎ひに急がした、小供は無事に歸つて來たが果



して三十分もしたら其場所で汽車が轉覆して四人の人が其犠牲になつたのである。

ピヤンキ、カペルリと云ふ女が千八百八十六年の九月八日の晩に菓物商をして居る彼女の母が詐欺に逢つて三百リレ程の金を失ひ、其上弟が病氣になつたと云ふ夢を見た、人々の宥めも彼女の心配を静める事が出来なかつたが十一日の日になつて母からの知らせで娘が夢を見た其翌日同じ二つの災厄が事實として起つた事が分つたのである。

之はシヂキックの引いた例であるが、或る機關手の見た夢の場合である、彼が運轉する汽車がとある處の踏切を通ると長い石橋に出た、處が不幸にも汽車が轉覆して七十呎もある谷底に墜落した、然し彼は幸に傷を負はないですんだ

此夢を見てから程なく彼にとつて新しい場所の線路を運轉する事になつたが此危険なる夢が現實となる時が來たのである、事實は殆ど夢に畫かれた通りで汽車が覆へる前に踏切を通り石橋を渡つた、機關車が落ちたのは丁度頂から七十呎の深さだつたが彼は幸にして死を免れたと云ふ事である。

豫覺の例は面白いものが澤山あるが次の例は特に著しきものである、遺傳の結果若き頃から神経質なヒステリックな習性を持つてた人が居た、今は伊太利の有名な學者になつてゐるが、彼は手紙が届いたり友達が來たりする事を豫知する事が屢々あつた、然し特に顯著なる實例は千八百九十四年の二月四日に彼がコモー展覽會が遠からずして火災に罹る事を明らかに豫覺した事である、彼が此爲にミラン火災保險株式會社にあつた凡ての彼の家族の株を五萬九千六百圓



の價額で賣つてしまつた事を見ても、如何に彼が此豫覺に對する確信が強かつたか分る、無謀とも見る可き此豫想は遂に其年の七月六日になつて事實となつた、茲に注意す可きは此火災が事實となつて現はれる頃は彼が感情はやゝ薄らいだが、火災の其朝は屢々凡てのものが焼けると云ふ事を叫んだそうである  
ロムブローゾーの記す處によれば彼が頭蓋は甚だ大きく千百六十一方立センチメートルの容積があつたそうである。

### 五 要 言

多き實例をしばし留めて、吾人は是等に對する簡單なる理論を少し書いて見たい。

抑もかゝる數多の挿話は吾人に何を物語つて居るのであらうか、嘗て科學は

かゝる現象を欺騙に非ずんば迷誤なりとして一笑に付してしまつた、然し今やそれは少くとも實驗的事實である、ロッチの言葉をかりて云へば、かゝる事實を否定する事は單に彼が無學を意味するばかりである、げに感覺の作用を越えたる斯くの如き心靈の現象は、吾人の充分なる驚嘆に價ひす可きものである、吾人は是等の事實を如何にして説明す可きであらうか、かの遠距離に起りたる事を認識し、よく未來の事を豫知する力は吾人が五個の官能によりて單に説明し難き事である、茲に於て吾人は五官以外の感覺の存在を豫想せねばならぬ、それは明かに第二意識(Sub-consciousness)又は潜在感覺(Subliminal sense)の存在を意味せるものである、而してかゝる感覺は吾れ等凡ての人に内在せるものではあるまいか、只其現はるゝは、恐らく吾人が精神の統一せられ、綜合せられたる時



である、而して催眠とはかゝる生理状態を現はせる時である、前述の多くの實例に於て特に其共通的事實が催眠状態なるは、よく之を説明せるものである、彼等が奇異なる心靈の現象は、凡ての精神が一點に集中せられたる時に於ける潜在感覺の働きである、さらば斯くの如き感覺は吾等人類が進化によつて新に得たるものであるか、果吾等が祖先の生物より繼承したるものであるか、それは來る可き年に於て此科學によつて決定せらる可き問題である、而して精神感應の如き第二意識の働きは如何なる方法によつて吾人の心に作用するのであるか、その現象は果して物質と同一なる法則に従ふ可きものであるか、物理學は明かに“action at a distance”なる思想を許さない、換言すれば距離を隔てた物質相互の作用が何等かの媒介物なくして到達する事を許さざるは近世の科學

が固く説明し主張する處である、音の傳播は媒介者たる空氣を要し、光は空間のエーテルを要する、波の音を聞き月の光を見て美はしと感じるのは凡てかかる媒介者の助である、空氣なくエーテル無き世はベートルヴェン無くラフアエル無き世を意味する、然らば吾人が精神の感應も同じく何等かの媒介者を須要とするのであらうか、若し心靈の現象が物質現象の一部に屬するならば答は明白である、然しながら果して一切の心理作用は物質を以て説明し得らるゝものであるか、茲に於て吾等は物質と心靈との問題に逢着して來る、而して之に解答を與へんとするものは新しき此科學である。

抑も吾人の精神作用が腦を離れて存在せざる事は從來の科學が主張する處である、換言せば吾人の肉體が死後微細なる元素に復歸すると共に、吾人が心靈



は消滅し再び物質界に向つて何等の運動をも起さしむる力を有せずとは、明らかに在來の科學がとれる見解である、かくて靈魂の不滅を否定し、凡ての超自然的現象を主觀の處作とし幻影として居る、然し乍ら吾人が心靈は果して肉體の死を以て斷絶せらる可きものであるか、げに凡ての心理作用を物質の範疇に容れ得べくんば、之が解答は明瞭である、若し然らずんば更に新なる説明を要せねばならぬ、而して之が解決に有力なる端緒を供給するものは先づ實驗として所謂自動記述の試験であり、事實としては妖怪の研究である、而して是等の現象は果して死者の靈が客觀的に存在せる事を示さざるものであらうか、次の章は之が答を讀者に語るものである。

## 二 自動記述と生命の殘存

### 一 バイパー夫人に關する實驗

自動記述(Automatic Writing)とは、昏睡(Trance)の状態に於て何等かの心靈との交通によつて全然自己の意識せざる事を自動的に書くのである、この異常なる現象を起す人の内に於て、最も秀でたる人は蓋し米國のボストン市に生れたパイパー夫人(Mrs. Piper)である、彼女は常に此自動記述の媒介者(Medium)として此新しき科學に有力なる材料を貢獻しつゝある。恐らくは此パイパー夫人の世に出でたる事は、此新しき科學を起さしめたる一つの動機であると云つても過言ではない、此夫人が有する奇異なる心靈の現象を攻究し始めたのは、



かのハーバードのジェームスである、其後此夫人に就て研究した人は多いが特にホヂソン教授の名は其内に數へらる可きものである、バイバー夫人は自働記述をなす者を自ら「Phinit」と呼び後には「Rector」と呼んで居るが、之が現はれていつも書くのだと云つて居る、次に書く實驗の實例は主としてロッチの行つたものである。

バイバー夫人の自働記述は、よく他人の親戚や知人の姓名又は年齢を書き、特に故人の事に就て書く事が多い、嘗て彼女はロッチ夫人の父の事に就て書いた、彼が哀れなりし臨終の模様を細やかに記載したが凡て事實と適合して居た、然も彼が逝きし年はバイバー夫人が僅か十四歳の折である。

同じ様な例はいくらもある、或試験に於てロッチが死んだ自分の叔父のジェリーと交通して何か彼が生涯中の出来事を記載してくれと頼んだ、昏睡に陥るや、やがて自働記述に叔父が現はれて書くには「吾々はボートに乗つて居たが轉覆してしまつた、止むなく岸迄游いだ、此事は汝の弟のロバートに聞けばわかる」と云ふ、ロッチ自らは、かゝる出来事を夢にも知らないのて後にロバートに尋ねると果してジェリーと共に溺れかゝつた事のあつた事を物語つたと云ふ。

ロッチはロンドンに一人の叔父を持つて居た、其叔父の子に雙子があつたがもう二十年も前に死んだ、ロッチはまさかバイバー夫人が此雙子の持つてたもの等は知つてゐまいと思つて彼等の所持品を何か送つてくれと叔父に頼んだ、小包がついて金時計を送つて來たが、家族のものには知らせずに、すぐバイバ



「夫人が昏睡に陥つて居る時に手渡して、其所有者を尋ねるとすぐ「それは今あなたの御叔父さんの所持品だ」と書いた。のみならず二人の小供が嘗て小河に遊んだ事や、畑で蛇を殺した事や、小銃を持つてた事や又其金時計を入れてあつた箱があつた事迄書いた、不思議なるこの記事は凡て事實と合つて居たのである。

更に或時は、ロッチ夫人の持つてた指環が叔母の形見である事や、當時叔母が臨終の折に云つた言葉迄書いた事がある、又ロッチの父の持つてた時計や鎖をよく知つてゐた、然も、それには昔あつた飾が今無いので不満の情をさえ述べた、又バイバー夫人が座つた椅子をさして、之は嘗てロッチ夫人の叔母に屬してた由を告げた、事實其椅子は夫人が結婚の折叔母からの贈物だつたのである。

千八百八十九年の十二月八日の朝行つた實驗がある、其座に居たジョン教の家族の事を書いた、特に彼が娘の事を述べた記事に次の様なものがある。

「あなたは可愛い今年十三になる跛の御嬢さんを持つてお出でになる、あの方は小さな雛菊でしょ、私は大好きです、黒い眼に、やさしい氣立て、音楽がお上手です、きつと立派な奥様におなりになる、それをお忘れになつてはいけません、ほんとに優しいまるで雛菊の様ですわ、よく御覧なさいあの方の目の上に黒い星があります、……」

實際彼の娘に雛菊と呼んで居る娘が居た、其伶俐な性質やら美しい容貌等は此記事の通りである、唯彼女が聾であるのを跛と云つたのは誤りであるが第二回の折には耳が聞えぬと直してゐるし又其時風を引いてる事等を書き添えた、



其他彼の他の小供の事や妻の事や彼が誤つて水に落ちし事實迄こまやかに書いた。

バイバー夫人が睡眠状態に於ける行爲は之に止まらずして、よく物に蔽はれたる手紙を読み又遠くに隔つた處に起つた出来事迄書く事がある、この實例として面白い小話がある、千八百八十九年十二月二十六日即ちクリスマスの翌日バイバー夫人が英國に居りながらカナダに居るロツヂの叔母の養子のチャレーに起つた事を同時に認めた事である、それは「チャレーと小鳥」とでも云ふ可き話で記事は次の如くである。

「チャレーが鳥を喰べた、多分雛鶏だが其爲に病氣になつた、それで今胃病になつて苦しがつて居る、随分弱つてる様だが聞いて御覽なさい、きつと知

らせてくるから」

早速手紙をカナダに出して聞くと返事が来た。「十二月の始めに小供たちが家に入つて来た雌鳥を撃つた、其頃は鳥を射る事が禁じられてるので匿しておいたが二週間程して丁度クリスマスの前日皆んなで喰べたがチャレーは一番澤山喰べた、尤も彼は其前から病氣だつたが、それで一層悪くなつた」と書いて来た、英國を遠く離れたカナダで起つた事を同時刻に見又知る事は何人も期待し難き事實と云はねばならぬ。

バイバー夫人はもとよりハワイ語を知らない、然るに彼女の自働記述中にハワイの女が現はれてハワイ語を書いた事もある、バイバー夫人に關する實驗の例は甚だ多いが之だけに止めておく、終りにヒスローブがとつた統計を書き添



えておこう、夫人に就て行つた十五回の試験中、彼女の潜在意識に映じた事件が二百〇五あつたが其中事實と符合したものが百五十二あつた、誤謬のものが十六で、眞偽何れとも判然しないものが三十七である。

此自働記述の働きを爲す人はバイバー夫人の外モーゼス (Stanton Moses) の如き、トムブソン夫人 (Mrs. Thompson) ホーランド夫人 (Mrs. Holland) 及びヴァーラル夫人 (Mrs. Verrall) の如きは有名である、トムブソン夫人に就て行つた實驗の内、嘗て心靈現象研究の創立者たりしマイアースが自働記述に出た事がある、ロツヂは千九百〇一年から彼の後を承けて此會の會長であるが、其會長たる事は其折自働記述に現はれたマイアースの意志によるのである、彼は更に自分の遺著「人格とそが死後の存在」に就て物語り詩人テニソンに逢ひたき

意志を漏らし又シヂェックやジエームスの事を云ひ、自己の哲學、思想に關して自分の態度をさへ説いて居る、又千九百〇六年にドールの自働會話 (Automatic Speech) にホヂソンが現はれて居る、彼は常に嚴そかなる音調で物語るが、其試験の折傍らにありしジエームス (Henry James, Jr.) に逢ふ事を喜ぶ旨を述べ且つ又自己の人格の永遠なる事を説き、決して地上の生命によつて吾人が靈の碎かるゝものでないと云ふ確信を述べて居る。

吾人は自働記述の實例をこゝに止めて、暫く其現象に就て考へて見よう、ここに注意すべきは、媒介者たる人が全然自己の記述せる事に對し何等の智識なき事と、昏睡より覺めたる後全く自己が何を書きたるかを意識せざる事とである、ホヂソンの研究によれば、バイバー夫人は、兩手及口とにて全然異なる三



個の事を同時に書きし場合もあつたのである、然らばかゝる現象を起さしむるものは誰であるか、それが、試験者の精神に非ざる事は又「チャレーと鳥」の小話がよく證明せる所である、吾々は更に其原因を他に求めねばならぬ。

## 二 同一人格 (Identity)

そもかゝる幾多の實證は吾人に何を教へて居るのであらうか、今やかゝる奇異なる心靈の現象を説明すべき道は唯一つ残れるが如くに思はれる、それは即ち同一人格なる事である。換言せばかゝる自働記述に現はるゝ記事は、媒介者又は試験者が精神の影響に非ずして即ち其記述に現はるゝ其人と同一人格の働さである。而して此推論を事實とすれば來る可き結論は何であるか、それは即ち死後なほ吾人が生命の殘存する事である。マイアースが逝く時若し死後にして尙

生命が存するならば、何等かの方法に於て精神の交通をせん事を約した、かのトムプソン夫人の自働記述にマイアースが現はれ、ドールの自働會話にホヂソンが語りたるは即ち彼等が死後尙ほ存在せる事を證するに餘りあるものではあるまいか、之に反して彼等故人の記事を同一の人格が働きと見るは謬見であらうか、吾人は此重大なる疑問を決定せんが爲に更に明らかなる實例をとりた

ステイトン、モーゼスの自働記述に或時デイー博士なる人が現はれた、彼はエリザベス女皇の頃に居たバリー大學の講師で化學者たり又練金術士であつて嘗てモルトレークに女皇を訪ふた事があるが其地で死んだと書いた、此古き時代の學者を、もとよりモーゼスが知らう筈がない、色々と苦心して調べた結果



英國博物館に納めてある未刊行の原稿に此事實が記載してあつた、之は明らかにデイー博士なる同一の人格の働きに非ずんば解し難き事實である。

ダウと云ふ紳士の子に船の醫者をしてる人があつたが航海中死んでしまつた船長は其遺産だと云つて父の許に貳百貳拾圓と彼が所持品であつた時計とを送り返して來た、所が或會合に於て媒介者に死んだ子の亡靈が現はれて來て、彼は病死したのではなく毒殺された事を告げ且つ遺産は七百圓であると云ふ事を告げた、此事實が端緒をなして終に事件が曝露し、船長は罪を蔽ふ能はずして處刑せられた。

之はアクサコフの擧げた例であるが或時媒介者にアブラム、フロレンティンなる人が現はれた、彼は嘗て紐育の市民であり八十三歳一ヶ月と十七日で死ん

だ米國獨立戦争に出た老兵である、かくて彼は悲劇多かりし地上の生涯より今や自由になつた事を喜ぶ旨を述べた、事實の眞は彼が寡婦によつて傳へられ、彼が死ぬ前多くの苦悶を嘗めた事が分つた。

嘗て或衝動に逢ふ毎に自働的にラテン語を書く習癖のある學校の先生があつたもとより彼はラテン語の智識はない、或日彼が郊外を散策してた時急に手に持つた杖が動き出して砂の上に字を書き出した、見ると「汝の父が今死んだからすぐ歸る様に、歸途其報知を齎らす人にきつと逢うだらう」とある、驚いて戻ると途中で果して使に逢つて父の訃音を得た。後日彼が病める時「明日三時に自分は死ぬ」と書いたが果せるかな同時に彼は地上の生命を終へたのである。

エドウキン、ラッセルと云ふ人があつた、ある金曜の日サンフランシスコの



聖路加寺院へバスを歌ふ爲に出かけたが不幸にして途上で卒中にあつて死んだ  
此事が起つた三時間程の後僧正のリーヴスは彼が不慮の死を知らなかつたが  
ラツセルの亡魂が現はれて片手を額にあて、他の手に歌の譜を持つてゐる姿を明  
かに見た。

或僧侶が自分の友達の誕生を祝ふ爲に手紙を書いてゐた、處が彼の耳もとに  
來て、「なぜ死んだ人に手紙を書くのか」と屢々囁くものがある、後に聞くと彼  
が友は其時刻に死んで居たのである。

同一人格の現象を證明す可き實例はまだ澤山あるが最後にカントに依つて集  
められたるスキーンボルグの遺稿中にあつた實例を擧げて見よう。

ストックホルムに居た和蘭大使の未亡人にマルテヴィールと云ふ人が居た、

彼の夫の死後にクルーンと云ふ人から借金の催促を受けた、然し夫の生前其金  
は既に支拂つてある筈だつたが生憎請取證書が見當らないので弱りきつてた、  
多額の金であるから色々考へた末、當時スキーンボルグがよく他界の靈と  
感應すると云ふ事が評判だつたので、若し夫を知つてゐるなら死んだ彼に請取書  
の在りかを聞いてもらいたいと頼んで來た、スキーンボルグは其大使がスト  
ックホルムで逝去した頃は自分はロンドンに居つたし且つ彼とは一面識ない由  
を告げた、處が三日程たつた或夜夫人に夫の亡靈が現はれて、其證書は二階の  
小箆筒の中にあるし、それと一緒に高價なダイヤモンド入りのピンが入つてゐ  
由を告げた、夫人は夜中驚いて起き上つて燈をつけて教へられた場所に行く  
幸にも二つとも見つかつた、夫人は安心して床に就いて熟睡してると、急にス



キーデンボルグが訪れて来た、彼が云ふには昨夜あなたの夫の靈が自分に現はれて其請取證書のありかを私に教へたから今告げに来たと云ふ。かくて此借金事件は無難にすんだが此實例は同一の人が夫人及スキーデンボルグの二人に共に現はれた事實である。

如上の實例は其同一人格なる事を證明する充分なる材料と思惟する、而してかゝる事實は吾人が死後如何の問題を解決す可きものではあるまいか、然も尙讀者に語る可き事は未だ半ばを盡さないものである。

### 三 媒介者(Medium)の働き

吾人の心靈が如何に奇しく驚く可き働きをなすかは是等の現象が明かに吾人に示す處である、凡てかゝる現象を主觀の迷ひと見たる見解は此事實を如何に

解釋す可きであらうか、媒介者が異常ある生理状態は更に次の如き、寧ろ突梯とも見らる可き現象をさへ起して居る。

ディッケンスが残した未定稿の小説に“Edwin Drood”と云ふのがある、或時、ジェームスと云ふ十四歳になる讀書力のない小供が此小説の續きを書くに云ひ出して終に之を完成した、學者の考察によれば其文章が不思議にもディッケンスの文章そのまゝだと云ふ、彼は昏睡に陥つて明かにディッケンスに逢つたと云つて居るが、覺めて後は唯傍らに散れる原稿を見るばかりで、彼自らは何を書きたるかは知らないのである。

伊太利にアルフレッド、バンシニと云ふ小供が居た、彼が七歳の頃催眠の境遇に移ると必ず演説をする習癖があつた、然も自己の知らない佛語、ラテン語、



希臘語等で宛らオレターの如き態度で始める、時としてはダンテが神曲の或章を全部朗讀する事もあつた。此小供が十歳になつた時更に奇異な現象が起つた八歳なる弟のパウロと共に僅かの時間に遠い處迄行く、或時共に半時間程でルポから離れてバルレッタに程近い海岸にボートで遊んでるのに氣がついた、或時は十分程でルポを去つて彼等の叔父の家に行つた、然も門に入る前に、これから十五日間は家に歸れないと云ふ事を豫知した、叔父や叔母が心配して馬車を備つて二人を家に歸そうとしたが忽ち見えなくなつてしまつたが程なくトラニに居る事が分つた、ルポに又戻そうと思ふとこん度はビスチェグリに移つてしまつた、兩親も到底此超自然的な方に抗し得ないのを知つて家に待つてゐるとアルフレッドが豫告した通りに十五日目には、ちやんと家に歸つて居た。

獨逸にマヒネルと云ふ水夫が居た、筆すら持つた事がないのに睡遊の状態に陥ると花や風景畫の巧みなものを書く、又デスムソンの如きは昏睡に於てかなり大きな油繪を畫くが只彼等が畫家たるの生命は目覺むると共に消ゆるのである、其他英國より決して離れた事のない小供が、すら／＼漢語を書いたり、佛蘭西の女で自身の知らない希臘語を巧みに書いたりする例もある。

アクサコフ自ら實驗した例によると或時實驗せる机が動いて“emck habaccha”と云ふ字を書いた、アクサコフは其文字を知らないので其意を尋ねるとヒブル語で「涙の谷」を意味しサルドヴィ(Sardovi)が用ひた言葉だと云ふ、そこでヒブル語の字引を調べると果して詩篇第八十三章に用ひてある語で「涙の谷」の意である、それからサルドヴィと云ふ名を色々調べると、不思議にも十七世紀



頃の醫者で Cardoso と云ふ人があつて彼が著書に “Nemek Habacha” と云ふものがあつた。

米國の精神論者が誇りとして居る “Arcana of Nature” と云ふ哲學書がある。ピュツヒナーの如きも此書を推稱して居るが著者の タットナル (Hudson Tuttle) は自分が書いたのでなく、自分なる媒介者を通して或精靈が書いたのであると云つて居る。

自分は之にて讀者に紹介す可き新しき科學の半ばを云ひ終つたのである。然も尙、吾人が深き注意に價すべき別種の現象は甚だ多いのである、今かゝる半ばにして此科學が思想上に及ぼす可き影響、使命を語る事は早い様に思はれる、然し前述の幾多の實例によつて吾人はそも何を學び得るのであらう、自分には人

生が新なる真相を呈し來るが如くに思はれる、吾等が眼に映りし世界とは、只一面の物象の世界である、然し此新なる科學は心靈の世界が獨立を宣言してはまいか、肉體の死とはかゝる靈界にとりて如何なる意味があるのであらう、ロツヂが「如上の事實によつて歸納し得らるゝ結論は吾人が人生の永遠に持續せらる可き一事である」と云つたのは吾等が耳にとつて新なる響きではあるまいか吾人が關はる可き問題は今や大きく且つ廣い様であるが、そは此論文を結ぶ可き終りを待ちて、今は「狂者と天才」の關係を述べたいと思ふ。

#### 四 狂者と天才

吾人にとりて最も興味あるものは蓋し此科學が供給せる實例より來る狂者と天才との比較論であらう。



前述せる多くの材料の内より著しき共通點を抽象し來るならば、それは彼等の行爲が異常なる生理状態に於てなされたる事である。換言すれば不可思議なる心靈の現象は常にヒステリア又は睡遊等の如き催眠的境遇に於てのみ現はる、事を許されて居るのである。而してかゝる状態に於ては恐らくは凡ての注意力が一點に聚集するが故に驚嘆す可き異常なる心理作用を惹起するのである、吾人がノーマルの状態とは、即ち注意力が各種の方面に配分せられつゝある事を意味して居る、故に超自然的とも云ふ可き彼等が行爲は、一面に於て狂的なる變態的なる事を明かに示して居る、換言すれば彼等は狂的なるが故に吾人が五官に於て認識し得ざるものを知覺し意識し得るのである。吾人は常に驚く可き才能を以て吾人が期待し獲得し得ざる事業を完成する人と呼んで天才と云つて

居る、然らばかゝる卓越せる才能を有する天才とは、狂者と何等かの類似があるのではあるまいか、凡ての天才は狂者であるとは、かのロムプロージが有名なる宿論である、げに吾人が醫學と歴史とは明かに此兩者に共通點の存する事を告げて居る、文化を飾れる天才が多く狂者の血統に屬せる事は統計の示す處である、かのニイチエは誠の狂者として死んだ、かのバガニニーは終生放逸なる生活を送つた、かのショーペンハワーは多くの奇癖を有して居つた、かのキーツは陰鬱なる生涯を送りつゝ常に美に慰を求めた、天才の生涯に奇しき逸話の多きは皆之が爲である。

2 天才は常に啓示の衝動に活けるものである、彼等は恰も夢幻の如き此境土に彷徨ひつゝ、宛らかの媒介者が昏睡に陥れる折の如く、彼等が精神は一點に統



一せられ、以て強大なる力を現はすのである、尙ヒステリアにかゝれる少女が遠く隔りたるものを認識し得るが如く、かくて彼等は吾人が到達し能はざるものを把握し得るのである、見よ彼等天才が沈思、冥想に耽る時、如何に凡てを忘れたる昏睡的状态に陥れるかは明なる事實である、げに彼等天才の事業は多くかゝる境遇に於てなされた。

かのゲーテが、幾度か夢に於て科學の問題を解決し、美はしき詩篇を作りたるかは、記録の語る所である、ドイデーやマウリの詩には夢に於て作られたるものが幾つもある、ステューヴンソンの小説が夢の裡に結構せられたるもの多きは彼自らの語る所である、タルチニーも亦夢に於て美はしき曲を作つたそは春四月の頃ほひである、彼が小さき室の半ば開きたる窓の縁に座して、快

き風にふかれつゝ、静かに眠り入りたる時、突然として彼が前に現はれたる人影がある、手には奇しきヴァイオリンを持ちつゝ、静かに嚴そかにソナタの曲を奏し始めた、そは Adagio のしめやかに哀れなる調べである、夢に覺めたるタルチニーは驚きて立ちつゝ己がヴァイオリンもて奇しき曲を、そのまゝに奏いた、彼が傑作 Sonata del Diavolo とは此曲に與へられたる名である。大なる宗教家が深き啓示の前に跪く時如何にかゝる經驗を嘗めたるかは著しき事實である、かのパウロがダマスコの門に於てイエスの復活せる姿を見たる時、彼は昏睡しつゝ倒れてあつた。

而して彼等がかゝる奇しき天啓によつて爲されたる事業が、後に於て彼等自らにも解し得ざる事のあるは往々にして見る處である、そは宛らバイバー夫人



が覺めての後昏睡状態にありし折の行爲を全く意識せざるのと同じである、嘗てテニソンが自分の詩に詳細なる註解をほどこせるものを見たる時自分はかゝる複雑なる考を以て作詩したる覺えがないと云つた事がある、詩人が往々にして自らの作詩の意を後に解する事が出来ないのは吾々のよく見る處である。

彼等天才は又常に一事に關して凡ての注意力を集中するが故に、彼等の行爲に失念多く、愚なる處爲に富めるは著しき事實である、ニュートンが或時は食事を忘れ或時は卵と誤認して金時計を茹でた事は彼が逸話の語る處である、スコットは自らの作りし詩を人が歌ふのを聞いてあれはバイロンの詩だと云つた事がある、フロードの言葉によればカーライルはよく自分の著書の内容を忘れたと云ふ、テルティは彼の手己の帽子を持ちながら自分の帽子を方々探しま

はつた事がある。

天才のかゝる多くの奇異なる習癖は即ち彼等が變體的生理状態に在る事を示して居る、彼等が現實界に於て嘗めたる悲惨なる運命は、彼等が狂者にして凡人ならざりしが故である、豫言者が故郷に容れられざるも之が爲である、吾人が歴史は常にかゝる狂者に對して殘忍なりし事を物語つて居る、若しイエスにして天才に非りせば殺されはしなかつた、若しサボナローにして愚人なりせば焼かれはしなかつた、天才！彼はかゝる榮譽ある名を有すると共に運命は彼を狂者たらしめて居る、然れども世はかゝる狂者に負ふ處多きを謝さねばならぬ、吾人の誇れる文化とは殆ど彼等狂者の賜物ではないか、否、百萬の群衆は常に一天才の後へに供從して此世を渡りつゝある、然も吾人は天才の出現を望む事



に乏なる今の世の、寧ろ凡人の多きに堪へざるのである、然り凡人とは狂者に縁遠き人間の總稱である。

### 三 心靈の物理的現象

#### 一 バラディノフ夫人に関する實驗、其の一

自分が以上に列擧した奇しき心靈の現象に對して、それが自然理法と違反するが故に其不可能なる事を稱へる人があるかも知れない、然し自分は其可能なるや否やを云つたのではない、只明らかなる眞の事實を物語つたのである、然も尙その總てを讀者に告げざりし自分は再び筆を執つて更に奇しき多くの事を書かねばならぬ、自分は此章に於て吾人が心靈によつて起さるゝ物理的現象を書

いてみたいと思ふ。

前に記載したバイパー夫人を除いて嘗て世に現はれたる心靈現象の媒介者として最も有名なる人が二人ある、第一はダニエル・ホーム (Daniel Dunglas Home 1833—1886) である、彼はエディンバラ近くに生れた人で物理的媒介者 (Physical Medium) の名を以て特に有名である、千八百七十一年にかのクルック (Sir W. Crookes) が「新しき力に関する實驗的研究」と云ふ題でホームに関する研究を發表した事がある、自分は興味ある彼が研究の報告を讀者に紹介したいと思ふが、後に記載する實例と重複する恐れがあるから残念だが止める、只近世科學の大發見たる電子論の創説者クルックスが今より四十年前の前に於て既に卓見ある此攻究を發表せる事と、ホームが最も驚く可き現象を起せる媒介者



の一人たりし事を記憶して頂けば充分と思ふ。而して第二の媒介者は自分が之から紹介しようと思ふユーザビア・パラダイノ夫人 (Mrs. Eusepia Paladino) である、彼女は千八百五十四年に伊太利のムルゲに生れた哀れなる孤兒である、彼女は路傍に棄てられたと傳へられて居るが、幼き時から下婢として人に養はれて居つた、彼は其折より幻想 (Hallucination) に襲はれたが、それは幼き時養母から度々撲たれた事や二歳の折に窓から落ちた事が原因をなして居ると云はれてゐるが、彼女はよく器具の敲かるゝ音を聞き、夜中着物を剝がれ、幽霊を目のあたりに見る事も屢々あつたと云ふ、幸なくして生れたる彼女はかくして遂にかゝる現象を起す事を職として糧の道を求める様になつたが、彼女が名は今や之が爲に此新しき科學の存在と共に永遠に記憶せらる可きものとなつた。彼

女は自らの種々の不思議なる心靈現象を起す者を "John King" と呼んで之が總ての現象を起すのだと云つて居る、彼女に關する研究者は甚だ多く其報告は恐らくは大部の書をなす程であるが、今はかのロムブローゾーの實驗を紹介するのに止めておきたいと思ふ、自分は先づパラダイノ夫人の心靈によつて起さるゝ力學的現象を書いて見よう、之は千八百九十二年でミランの集合 (Seance) で行つた實驗である。

適當な室に一つの机を設け其周圍に、夫人を中に狹んで兩側に試験者が座し各自互に手を繋ぎながら机の上に置くのである、暫くして彼女が催眠状態に移ると、徐ろに机の運動が始まるのである、夫人の足は又試験者の足によつて抑へられて居るからもとより夫人が動かす筈はないが、机は漸次動いて一方の足



を高く揚げ始める、實驗の結果によれば机の一端は十五センチメートルの高さに揚がり檢力器は三十三キログラムを示したのである、然もそは只足を揚ぐるのみに止まらずして何等媒介者が直接の力なくして机は全く床を離れて宙に浮び漂ふのである、ニュートンが重力の法則に違反せる此不思議なる現象は、ブラ  
デイノー夫人の實驗に於ては屢々起る事で、計算の示す處によれば普通は十乃至二十センチメートル程揚るが、時としては六十乃至七十センチメートルの高さ迄昇る事がある、然も數秒の間かくして波動的に中空に浮んでるのである、かゝる折は充分に寫眞を取る事が出来るのである。

彼女は催眠状態に於てかく机を揚ぐるのみならず又往々にして椅子に座し乍ら自らの身體をも宙に浮ばせて机の上迄揚げるのである、かくて昏睡しつゝ彼

女は降りる旨を述べ静かにもとの位置につくが、かゝる事は全く運動の第一法則に違反した現象と云はねばならぬ、若し然らずんばかゝる運動を起さしむ可き力が物質界以外にも存在する事を許さねばならぬ、かの前に述べたホームや又ツッカリニ(Zuccherini)の如きは、特に身體の上昇を自在に行ふ事に於て有名である。

自らの體を浮ばせたる彼女は又體重を變化さす事さへした、此實驗は彼女を秤の上に乗せて行ふのであるが、殆ど完全なる實驗の場合によると夫人の體量は六十二キログラムあつたが或時分銅は下降して十キログラムの減少を示したのである、そこでこん度は其増加を希望した處が直ちに分銅は上昇して反對に十キログラムの増加を見たのである。



又或時の試験に於て、彼女から隔つてゐる窓の側に二十四ポンド半程する机が置いてあつた、その上には寫眞の種板や節度計が乗せてあつたが、それが自から動いて前に進み出したが、やがて又ものと位置へ戻つた、のみならず節度計の機械は動き始めてタクトをとる音が響き出した、暫くして其音が止むと機械は又もとの如く閉ざされてしまつたのである。

かゝる微妙なる機械手は時として又亂暴をも働いた、彼女は机を毀して見せると契つたが果せる哉彼女が昏睡に陥るや例の如く机は何等の接觸なくして其四脚を以て運動を始め、漸次其度を増して激しき力もて床から何度も踊り上つた、かくて遂に釘はぬかれ足は折れ机は原形を保たない程に迄なつた、白晝試験者の眼前に於て、肉眼に見えざる何者か來つてかゝる動作を起す事は、吾

人が深き驚嘆に價す可き現象と云はねばならぬ。

抑もかゝる力は何處から生ずるのであらうか、此不可知なる力は未だ神祕の裡に葬られて居るが、注意す可き事は媒介者が試験の折及後に於ける力の増減である、彼女の力は検力器に於て普通三十六キログラムを示してをるが、彼女は催眠時に於て四十二キログラムの力を得た事がある、又モルゼリが行つたゼノアの集會では百十キログラムに迄達したが、彼はこの量が優に机を破壊し得る力だと云つて居る、然し試験の後には力の減少を來すのが常で或時は十五キログラム迄減じた事がある。

## 二 パラダイノー夫人に關する實驗、其の二

パラダイノー夫人が心靈の現象は科學の理法に反したる更に多くの行爲をし



て居る。

或日の集會に於て彼女から一呎半程隔つた處に鈴を置いといて、それを鳴らしてくれと云ふ事を頼んだ、彼女の手と足とは、いつもの如く人々によつて繋がれて居たが、希ひは忽ちにして満された、彼女の裾は波打つが如くに前に進み出た、ロムブローゾーは疑しみながらそれに觸つて見ると恰も瓦斯に充ちた袋の如く少しく抵抗があつたと云ふ、此物質ならざる一種の手は衆目の前に於て遂に突如として前に進みつゝ鈴を取つたかと思ふと忽ちそれを鳴らした、彼女が裾の煽る事は屢々起る事であるが机や自身を宙に浮ばせる時などは此裾が延びて恰も其運動を助けるが如き作用をするのである。

不思議なる現象は之に止まらずして彼女は宛ら魔術者の如き行爲をも行つた

或夕べ彼女に机の上に笛を出して呉れと頼むと何處からともなく一個の笛が机の上に落ちて來た、袷飾りを解いてくれと希ふと忽ちにして事はなされた。

彼女は又他人が何を思惟せるかを感應してよく其意を満した、スラダ教授が室にありし瓶の中に水の注がるゝ事を心に希願した時程なく其中に水は満された、のみならず水を入れたコップをさへ試験者の口へ持つて來た、又ベニスで行はれた集會で或婦人が頸飾りをはめて來て、それをバラディノー夫人の頸に掛け變へたら彼女の贈物にせん事を心に約した、然るに何時の間にか昏睡せる媒介者の頸はその輪を以て飾られ遂に此よき贈物は彼女の有に歸した。

同じ様な例はミランの集會の折に起つて居る、試験者の一人が媒介者から離れた所に置いてあつた椅子の上に外套を掛けておいた、其ポケットには色々の



物が入れてあつたが、いつの間にかそれが皆机の上に置かれてある、然も更に奇異なる事は明かに椅子の上に掛けてあつた外套は、何者の働きによつてか パラディノ 夫人が着てゐたのである、もとより其間彼女の手は試験者の手によつて鎖の如く互に繋がれてゐるのである、媒介者自身も總てかゝる現象が何時行はれるかは知らないのである。

密閉せられたる室に笛や水が滲入し、頸飾や外套が自ら媒介者の纏ふ處となるのは明かに物質不可入性の原理に違反した事である。

彼女にはかゝる種々なる現象を起す力が興へられたるのみならず、彼女は又 ミューゼ が神の寵兒であつた、布につゝまれた上、箱に入れてある粘土があつたが、彼女がその上に手を置いて昏睡しつゝ出来上つた旨を述べると奇しき彫

刻は自からなされて手や顔の浮彫が出来て居る、然も其顔には パラディノ 夫人自らの巧みなる肖像もある。無學なる彼女は生れながらにして フィディアス が術を興へられたるのみならず、又 ベートーヴェン が技をも行つた、傍にありし マンドリン は彈奏者なくして自ら響き始め、何等の接觸なくして ピアノ は其美音を人々の耳に傳へたのである。

かゝる種々の現象が如何なる力に依つて行はるかは吾人が視覺を以て觀察する事は出来ないが暗い室に於て行ふ實驗の際には吾人が觸覺に感ずる現象が屢々起るのである。

例へば ミラン であつた集會の折には パラディノ 夫人が深き催眠の境に入ると、試験者の顔や體に何物かゝ來て觸れるのである、試みに手を舉げて見ると



頻りにそれを降ろさうとする者がある、然も單に人の體に觸るゝのみならず微妙な働き迄する、シャッパレリは眼鏡をかけてゐたが、何物か來てそれを取りはずしてしまつた、机の表面と殆んど同じ位な大きさの椅子があつたが、此重きものは正しく机の上に安置された、暗中に於てよく何等の誤りなく人の眼鏡をはずしたり、同じ程の大きさの椅子を机の上に重ねたりする事は、微妙なる働と見ねばならぬ。

72

然し觸るゝものは之のみでなく往々にして人の顔に觸れる場合がある、或時媒介者に接吻を乞ふと、程なく何人かの唇が來て明かに接吻を與へた、然も其折に髪の毛や鬚や皮膚等に觸れると明かにそれが人の顔である事を感じるのである。

かくて吾々に觸るゝ事のみを許したるかゝる或者は、今や其姿の影をさへ現はす様になつた、或實驗によると燐をぬつた紙を机の上や壁等に貼つて置くと其上に明かに二つの手の影が寫つた、媒介者の手は常の如く試験者の手によつて握られてゐるが、映る影を見ると様々に動き廻つて居る、試験中時として手を拍つ音を聞く事があるが同じ手の働きの様に思はれるのである、又皿に入れてある粘土に時として手の形がついて居る事があるが、媒介者のとは常に大きさを異にして居るのである。

73

物の運動又は音響等の物理的現象を起せる彼女は、かくて又光學的、電氣的現象をも起して居る、暗室に於て行はるゝ實驗の際には、よく光を發する物體が現はれる、時としては白色を帯びたる霧の如きものが柵引く事もあつたが、多



くは媒介者の周囲を悠遊して居る、而してかゝる現象が單に吾人の妄想、幻覺によつて起るものでない事は種々の精密な機械を以て行はれてゐるのを見ても明瞭である。

或時媒介者の頭上に黒紙を以て厚く蔽はれてゐる種板を置いたが、後になつて現象して見ると明かに手の形が寫つて居る、之は明白に放射能 (Radio-activity) の作用が働きつゝある事實を客觀的に示すものである。

又彼女は常時に於ては檢電器に對しては何等の感應をも起さないが、昏睡状態に於ては明かに作用するのである、かゝる事實は彼女の心靈現象が電氣現象と密接なる關係を有してゐる事を示して居る様に思はれる。

自分は之より更にパラディノー夫人が他方面に於ける心靈現象を書かねばな

らぬ。

### 三 パラディノー夫人に關する實驗、其の三

此處に記さんとする處のものは彼女によつて起さるゝ妖怪現象である。

抑も彼女の行爲が暗中に於て特に著しき現象を起す事は事實であるが、試験者にとつては錯誤を避くる爲には明るき室を用ひねばならぬ、此兩様の要求を満さんが爲に多く彼女に關する實驗は二つの室を用ひて居る、即ち一方を暗室にし、一方を普通の室にし其の二室の間をカーテンを以て仕切つて置くのである、かくて光線のある室に机をすゑカーテンを背にして机の一侧に媒介者が座り其兩側に試験者が座を占めて例の如く互に手を繋ぎあつて實驗を行ふのである、夫人が精神を統一しつゝ、昏睡状態に沈むと忽ちにして種々の現象は起つて



くる。

閉ぢられたる室の風なきに、かのカーテンは先づ徐ろに動きを止め煽り出すのである、然も其一端は前に延びて机の脚を結び、夫人の求めによつて彼女の頭を纏ひピンでそれを止める事すらした、千八百九十五年ネーブルスの集會に於ては、自からに動く此カーテンは傍らにありしロムブローゾを捕へて、彼が體に固く纏ひついてしまつた、それを取り去るのにかなりの力を要したとは彼自らの語る所である。

76

かくて又二つに半ばより開かれたるカーテンの間から時々何者か現はれ始めた、アクサコフは立つて手を其中に入れると度々人の手に觸れたのみならずカーテンの裏から彼の手を掴む者がある、遂には暗室に置いてあつた椅子を彼

に握らせると思ふと又忽ちに奪つてしまつた、シャツパレリの如きはカーテンの裏から何度も撲られた、暗室には誰一人居なく且つ媒介者の手は試験者の手によつて抑へられて居るにも拘はらず、かゝる現象は屢々起り遂には肉眼を以て暗室から現はるゝ人の手を明かに見た事さへあつた、或時の如きは拳が媒介者の頭上に現はれたが、それが漸次開いて行く形をも見た、この奇しき手の幽靈は管に其姿を現はすのみならず其動作に至つては特に奇異なものがある。

77

モルゼリー教授は或時大きな手が來て彼の右手を把んだのを覺えたが其時媒介者は、「あれを御覽なさい」と叫んだ、見ると室には緑色のランプがついて居る程なく其光は消えたが此ランプは明かに彼のポケットの中に入れて置いたものである、何時何人の手が來て之を掠めて火を燈したのか彼も彼女も、もと



より知らないのである。

或時カーテンの傍にあつた検力器が、床から離れて机の上迄持ち上つて暫く其上を運動してゐたが、遂にカーテンを開いて暗室に入つてしまつた、程なく其隙間から手が現はれたが、手には検力器を握つてゐる、程なくして再び机の上に置かれたが、検力器の針は百十キログラムの壓力を示して居た、餘程の力が働いて居るのである。

或折には紐を机の上に乗せておいて之に結び目をこしらへて呉れと頼むと、紐は無くなつて再びカーテンの間から現はれて來たが見ると三つも結び目が距離を等しくして正しく結んであつた。

集會に列した一人の青年がポケットに腕輪を入れて置いたが、パラディノ

夫人は直ぐそれを知つて例の手が現はれいつの間にか取つてしまつたが、剥さへそれを彼女の腕にはめた、彼は又腕輪と共に手紙を入れて置いたが、彼女は其内に書いてある文章の梗概を述べた、未だ開封して無かつたものだが開いて見ると果して的つて居る、然も無學なる媒介者は文字を書く術すら知らないのである。

現はるゝものは手のみに非ずして人の顔があり〜と暗室の中から現はれた觸つて見ると明かに額あり頬もあり鼻もあり口もある、疑みつゝ暗室の中に入つて見ると誰一人居ないのである。パラディノ夫人が心靈の力はかくて遂に完全なる人の姿をさへ衆人の前に現はした。

それは千九百〇三年にゼノアに於て開かれた集會の事である、ロムブローゾー



が媒介者に机の上にあるインキ壺を動かしてもらいたき旨を述べると彼女が答へるには、「そんなつまらない事よりも、あなたの死んだお母さんを出して上げましよう」と云ふ、しばし待つと常の如く先づ机の運動は始まつたが、遂に此大膽なる約束は果された、かのカーテンを静かに開きつゝ、面帕を着たる母が姿は目のあたりに現はれたのである、彼女は机を一周して遂にロムブローゾの傍に來り、優しき言葉もて「チェザールよ、吾が子よ、吾が寶よ」と囁いた、かくて面帕をとりて母は親しく此老科學者が唇に接吻した、彼はその後二十回程もバラディノー夫人の集會に於て彼の亡き母に邂逅せる事を思ひ出深い言葉もて述べて居る、彼が母の姿は媒介者の丈より四インチ程低く、且つ彼等が互に一面識もない事は明かであるから、その亡靈の姿が媒介者自身に非ざる事は誠の事實である。

同じ様な現象は幾度も起つて居る、或日媒介者は幽靈を現はす可き旨を約したが、程なく彼女が深き昏睡に陥ると、一人の美しき乙女が現はれた、身は麗はしき布もて蔽はれ、暖き呼吸をもらし時として黒髪を櫛けづりつゝ、静かに手を口にあてゝゐる、此美はしき姿を長く留めんが爲に媒介者の許もて寫眞を取らうとした、然し乙女は彼女の意に反しつゝ、頭や手を以つて之を拒み二度迄種板を毀してしまつた、此實例はよく媒介者又は試験者以外の獨立せる心が働ける事を證明して居る。

自分は數多き中より撰んだ實例を之だけに留めておきたいと思ふ、只かゝる現象を起す際に於ける注意す可き事項の二三を書き添えておかねばならぬ。先



づバラディノー夫人の妖怪の現象を起す場合には主として其體重の減少を見るのである、且つ幽霊の消滅と共に再び増加する事があるのは、兩者に何等かの關係が存する事を物語つてはるまいか、且つ種々なる物理的現象を起す場合に他の人によつて握られつゝある媒介者の手が少しく動くのを覺えるのは兩者に何等かの關係ある様に思はれる、而して最も顯著なる事實は昏睡に於ける媒介者の精神状態である、彼女は深き催眠の境に入るや其容貌には著しく衝動の發作が現はれるのである、時としては苦悶の情を現はし、時としては悲愁の容を浮べ、時としては笑ひ喜び、時としては怒り叫ぶのである、或時は恐怖の情に罹られ或時は罵倒の語氣を含み、或時は戀情の表現をなし或時は幻覺に襲はれるのである、かくて汗を流し涙をこぼす事は往々である、斯る際には常に心臓の鼓

動數を増し一分間に百二十位迄に達する事があるが呼吸數は減じて僅か一分間に十二を示す事もある、試験後は又色青く力を失ひ體重を減ずる事が常である。抑もバラディノー夫人がかゝる空間、時間の觀念を越え、自然の法則と全然相容れざるかゝる心靈の現象を如何に説明す可きであらうか、此新しき科學はかゝる現象に對し未だ無學である、吾人は只心靈の限りなき能力の存在を感じて人生が神祕の前に驚嘆の叫びを發せざるを得ないのである、自分は更に筆を續けて人生が神祕なる一面を紹介せねばならぬ。

#### 四 妖怪現象

##### 一 幽 靈 (Apparition)



古き世よりの歴史に幾度か妖怪の物語りが反復せられ、人類の憩へる總ての地に此現象が語られ、剩さへ文學の一要素をなしたるにも拘はらず、吾等が思想は常に妖怪が存在を否定して居つた、之が理を求むる者は總てかゝる現象を主觀的幻覺の所作と見た、然るに幽靈が客觀的存在は今や此科學によつて實驗的事實とさへなつた。

吾等は重量を有し密度を有し弾性を有する事を知る空氣が、吾人の肉眼によつて認識し得ざるの所以を以て其存在を否定する事が出来ようか、世界は廣き量を有し深き質を有して居る、吾人が五官に於て認識し得らる可き世界とは恐らくは其量に於ても質に於ても甚だ哀れなるものである、吾人が知覺し得べき世を唯一絶對なりと思惟する事は宛ら水に住まえる魚が水を出でたる世を知ら

ざるが如く又洞に住む魚が光の世を見る可き眼を失ひたるのと同じである、音樂者は吾等が知覺し得ざる音響の世界に複雑なる音調を感ずるではないか、畫家が色彩に對する感覺は遙かに衆人より鋭敏ではないか、詩人は吾等にとりて歌なき世にも限りなき詩趣を汲むのではないか、天才の世界と凡人の世界とは其質量に於て大なる徑庭がある、バイバー夫人やバラディノー夫人は吾等が未知の世界に深く入りたる人である、世界を自己の官能の裡に制限したる人は、いみじき誤謬に陥りたる人と云はねばならぬ、世界の神祕は吾人が心靈の働きを無限に容るゝ程深く且大なるものである、而して幽靈の存在が單に不可能なる理由の許に否定せらるゝは吾人が能力の可能性を限りたる愚なる思想と云はねばならぬ、事實は幾度か吾人の前に提供せられたではないか、自分は今其事



實のいくつかを書かねばならぬ。

多くの實例の中に於て最も有名なもの、一は蓋しフローレンス・クック (Miss Florence Cook 1856-) に依つて現はされた幽霊である、彼女は此幽霊にカティイ (Katie King) なる名を與へて居るが、クルックスやウォーレンスの實驗の際に幾度か現はれて居る。クルックスの研究報告は殊に興味があるが、此みめ美はしき幽霊は三年が間も續いて現はれて居る、媒介者のクックは錯誤を避ける爲に電氣をかけた金網に迄入つて實驗を行つて居るが、いつもカティイの姿は現はれるのである、之を以ても媒介者とカティイが同一の人でない事は明かであるが然もクックの髪は黒色を帯びて居るがカティイのはブロンズの色を帯び且つ短く切つてあるとうである、彼女は只に死したる亡霊にあらずして、地の人が

總ての表情を留め、時としては悲しみに咽ぶ聲をも出し、時としては紙をとつて字を書く事もあつた、驚かるゝ事はクルックスは此幽霊が生理状態をも研究したが彼の診断によれば此幽霊カティイが心臓の鼓動は七十五であり、媒介者のは常に九十を示して居たとうである、此幽霊は幾度か寫眞にさへ寫された讀者が懷疑は尙此驚く可き事實をも否定せらるゝであらうか、自分は更に他の一例をとりたい。

有名なる媒介者デスペランス夫人 (Mme. D'Esperance) に現はるゝヨランダ (Yolanda) と呼ぶ幽霊がある、彼女も三年が程は續いて現はれたとうであるが試みに寫眞に寫された彼女が姿を見ると、頭より長さ布を垂れて白衣を纏ひつゝ、やゝ微笑を含みながら吾等を眺めて居る、ふさふさとしたる黒髪は左右の



肩に分れて長く垂れ、彼女の愛らしき唇や、やゝさがりたる涼しき眼には豊かな表情をさへ現はして居る、妙なる此美貌は心ある人にとりて消ゆるの痛ましきを感じると云はれて居る。

ドミンゲー(Carmen Domingues)によつて現はるゝ、エリーノラ(Eleanora)の全身幽霊は、靡るげなる聲もて挨拶する事が常であつた、彼女は室を彷徨ひつゝ試験者の傍らにありし椅子に座して一時間もそこに居た事がある、彼女は己れの髪の毛や袖に觸るゝ事を許したがアクサコフの語る處によればそれは光を放てる美はしき衣であつたと云ふ。

記事の示す處によれば今より五十年前、エステラ、マルタには彼女の亡き夫が媒介者のフォックス(Katie Fox)を通じて五年の間絶えず現はれたらうであ

る、然も此幽霊は常に媒介者の知らざる佛蘭西語を以て字を書く事が常であつたと云ふ。

リシェーの研究によれば、ボア(Boa)と呼んだ幽霊は、呼吸をし然も其際には明かに炭酸瓦斯を出したらうである。

體量を有し容積を有し脈搏を有し呼吸を有し言語を知り文字を知り、然も愛憐、溫和、眞摯、幽鬱等の如き性格上の表情をさへ有する彼等を單に吾人が迷誤として考へ去る事は、既に其餘地が無くなつた様に思へる、然も吾人が精神作用と全く離れたる寫眞に影ずる事は、それが客觀的實在の最も明なる證明ではあるまいか、のみならずかゝる幽霊が媒介者と同一人格に非ざる事は明かである、容貌を異にし性質を異にし身の丈を異にする事實は之を示して居る、面白



き幽霊の物語りは、ガーニーやバレットやマイアースに依つて編纂せられた  
“Phantasms of the Living”に甚だ多く載つてゐるが今は其の煩瑣を避けて、  
かゝる現象に對する一つの假説を紹介したいと思ふ。

若し死後にして尙かく生くるならば吾人はかゝる幽霊を形造る可き物體の存  
在を推量し得べきである、換言すれば其人格、意識を永遠に保持す可き爲には  
何等かの物體が存在せねばならぬ、かゝる推論より、マクドゥガル (Dr. Mac-  
Dougall) は大膽なる假定説を發表して「心靈の重量」が存在を主張した、彼は先  
づ心靈が永遠に其人格を保持せんが爲にはエーテルの如きものに非ずして重量  
を有せる物體によつて構成せらる可きを推測し而してかゝる物體は死の際に肉  
體より離るゝものなる事を考へた、而して彼は此考察に對する實驗として吾等

が死の際に於ける體重の減少如何を研究した、此愉快なる實驗の詳細を茲に紹  
介する暇がないが、彼は死に瀕せる病者を秤にかけて精密なる觀察をした、や  
や完全なる試験によると死の瞬間には平均一オンス乃至二オンスの減少を見た  
のである、そこで彼は其減じたるものが靈魂の重量であると斷定した、かゝる  
假説の眞偽に對しては批評す可き餘地が多いにしても今はかゝる企てを試みた  
人もあると云ふ事を知つて頂けば充分と思ふ、自分は議論の歩を進める爲に更  
に別種の實證を書かねばならぬ。

## 二 精靈寫真 (Spirit Photograph)

幽霊の存在が單に主觀的妄想でないこと云ふ事は、所謂精靈寫真によつて益々  
其根據を強めて來た、此寫真に關しては、キャリングトンの如く懷疑を持つて



居る學者も多いが兎も角世を騒がせる此事實は次の如くである。

千六百六十一年三月にボストンに居たマムラー(Muller)と云ふ人が一枚の寫眞をとつた、處が一人の見知らぬ姿が寫つてゐる、彼は古い種板を誤つて用ひたのだと思惟して再び新しきものを用ひて寫した處が一層明かに同じ姿が現はれた、此不思議なる事實が恐らくは精靈寫眞の起りをなしたのである、此事實は當時多くの人の好奇心をかつて幾多の實驗が試みられた、就中ボストンの寫眞師ブラック(Black)は若し眼前に於て、其寫眞をとつて呉れるなら五十ドルを出すと約した、此申込は直ちにマムラーによつて承諾せられ彼はすぐ撮影を試みた、ブラックは精密なる注意を凡てに拂つて種板を選び且つ現象をさへしたが、不思議なる精靈の姿は其折にも現はれたのである、かゝる事實に勵ま

されて彼等は紐育に此寫眞の展覽會を公開した、一時は人を惑はすと云ふ角でマムラーは拘引された事もあつたが、事實と知れて許されたと云ふ、かゝる事で益々熱心なる攻究者がふえたが、プリストルのペアジはユトランドと云ふ媒介者を用ひて多く精靈寫眞を得た、スレーターは又巧みな寫眞師で且つ媒介者たる力を持つて居たが嘗て彼の姉を寫した時其傍にオーエンの姿が現はれた、彼は生前若し吾人に靈があるならばスレーターに現はるゝ日のある事を約したと云ふ。

ダウと云ふ人が居たが彼の戀人は不幸にも若くして死んでしまつた。然るに程なく或媒介者の告げによつて彼女がマムラーの精靈寫眞に現はれると云ふ事が分つたが果して失はれたる戀人は、再び其の美はしき姿を寫眞に現はしたの



である、かゝる寫眞は今尙多く寫されてあるがカレラスはランドネと云ふ女の媒介者によつて寫眞をとつてゐるが、見ると布を纏へる女が髪の毛豊かに垂れて寫され、然も青白き死の面影をさへ示して居る、ランドネは此寫された人をベッラ(Bebella)と呼んで居る。

而してかゝる寫眞は多くの場合始めは星雲の如き點が現はれ次に星となり太陽となり人の頭となり遂には體部を現はしてくるのである、かゝる寫眞が寫される、様々なる場合を書いて見れば、偶然的に寫る事もあり、媒介者及寫眞師の全然知らざる故人の寫る事もあり、又現存せる人の姿が寫る事もある、之は所謂二重人格のよき例證であるが又媒介者にのみ見えて他人には見えざる姿が寫る事もある。

而して若しかゝる事實を眞なりとすれば、吾人が肉眼によつて認識し能はざるものが鋭敏なる寫眞に感ずるのである、更に推測すれば此大氣中には、幾多の精靈が彷徨へると見る可きである。自分は實例の最後として之から妖怪の活動に關して書こうと思ふ。

### 三 幽靈屋敷 (Haunted House)

死後の心霊が活動の實例として最も著しきものは所謂幽靈屋敷である、いつの年、何處の地に於ても幼き折より人々が耳にするものは妖怪の話である、吾等が文學に悽愴深刻なる材料を供給したるものは多くの場合に於て又物凄き幽靈の物語りであつた、近くはかのハーンの作物が幽陰沈痛の調を帯びたるを以て讀者の心をさしたるは、又かゝる妖怪を主として話題に選んだが爲である、



此處には吾等が想像の力もて潤色せられたる物語りは別として、純なる實例の少しを書いて見たい。

これは千八百六十七年フイレンツェの或家で起つた事である、或日地下で奇しき音が響くのを聞いたが、まもなくして室内の椅子が毀れ始め皿が碎かれ刺さへ石の雨が降り出した、或者は其折に幽霊の姿を見たと言ふ。又ネーブルスの或家では一定の時間をおいて必ず奇異な現象が起つた、始めは物を敲く音がするが夕暮から夜にうつると其響は漸く音を強めて室内の器具が動き出した暫くして静かに人の足音の近づくのを聞いたが遂に戸の傍らに幽霊の姿が立つた、夜になつて家人が外出して歸つて見ると戸は室内にある器具で塞がれてる爲入る事が出来なかつたと云ふ。之は露西亞人の家に起つた事であるが一日べ

ットから赤い球が現はれたが、だん／＼脹れて遂に輕氣球の様に迄なつた、それが爲額や器具が方々で覆り始めた、氣味が悪いので家族はすぐ引越したが不幸にも禍は新しき家をも追つてナイフや銃等が宙に浮び出し戸や壁に頻りにぶつかる、更にひどい事には着物が背中で焼け始めて遂に全家まで焰が嘗め盡してしまつたと云ふ、かゝる例は甚多いが類例を分けて書いてみよう。

第一の分類に入る可き現象は、媒介者の影響によつて起る場合である。

或家で夜になると絶えず水の流れる音や鈴のなる響がしたが、時としては何者か來て床の上に寝てる人の髪の毛を捕へて高く宙に揚げた事もあつた、或時は臺所にある道具が其居所を變へたり、着物や帽子がいつの間にか異つた場所に移されて居る、色々其原因をしらべて見るとかゝる現象の媒介をした者



は其家に居たヒステリアに罹つて居る娘である事が分つた、後に其娘が結婚して家に居なくなつたら二年間も續いた此奇異な現象は全く終つてしまつた。

テューリン府のバヴァ通六番地にフメロと云ふ人が小さな旅館を持つてゐた、所が其家に或日妙な音が何處からともなく響いてくるが眞夜中になつて益々其音が烈しくなつて來た、よく其音の出所を調べると酒庫にある空瓶が頻りに破れるのである、高い所に積んであつた瓶が落ちて來たり人が其室に入らうとするとそれを妨げに戸にぶつかつて破れたりする、時として二階の寢室にあつた着物が下の室に運ばれてゐたり室にある可き帽子が芥溜の中に入つてゐたりするロムブローゾーは特に此化物屋敷に就て研究したが、或日例の酒庫に入らうとして近づくや否や、家人が前以て告げた様に、すぐ瓶の毀れる音がし始め

た、彼は六個の蠟燭を照してよく室内を見たが忽にして瓶が飛んで來て彼の傍らで碎れた、彼は種々其原因を求めたが別に室内には何等かゝる現象を起さず様なものはない、然も瓶は毀れつゞけてたが或物は靜かに宙に浮んで下に降りたりする、凡そ一時間餘りも居たが十數本の瓶はかくて碎かれてしまつた、彼は止むなく外に出て戸を閉ざると不思議にも其音は止むで了つた、そこで彼は先づ家族の人々の健康診断をし始めたが其家の主婦がヒステリアの徴候がある事が分つたので主人に云つて彼女を外泊さして見た、三日間の留守の間別に何等の異變も起らなかつたが再び彼女が歸つて來ると奇しき現象は反覆せられた、此家に起れる妖怪的現象は更に多いが他の一例をとらう。

千八百九十一年パトラー夫人が彼の夫と共にアイルランドに居る時、一夜心



地よげに飾られたる奇麗な家を夢みた、此夢は彼女の心に深き印象を刻んだが同じ夢は連夜續いた、翌年彼女は夫と共にイングラランドの方に越して来て色々住家を探して居たが、ハムプシャーイアーに、家があると聞いて行つて見ると、驚く事には夫人が夢に見たのと少しも異ならぬ門が立つて居る、彼女は夢に見た家の構造を精密に知つて居たが入つて見ると夢に畫かれたのと全く同一である、唯戸が一枚見知らぬのがあつたが聞いて見ると六ヶ月程前新しく附けかえたものだと言ふ、其家は幸にして非常に安かつたので直ちに買う事に決したが、契約後餘りに廉價なので不思議に思ひ乍ら其理由を尋ねると、一年程前に夜な〜幽霊が出た家だと云ふ、而して更に驚く事は其幽霊とは**バトラー**夫人其人であつたのである、此實例は彼女がかゝる現象をなした媒介者である事を

示すと同時に二重人格の存在を示せるよき實例である。

以上の例は現存せる人が媒介となつて種々なる現象を起す實例であるが次は死者の霊が働く場合である、而して第二の様式に入れらる可きものは特に悲劇的の死を遂げた人によつて起さるゝ場合である、然もそは往々一時的現象でなく數代をさへ續けて起る事がある。

千八百八十年にスコットランドの或城を借りて住んでた婦人が居た、一夜彼女が目覺むると首なき人の姿が立つて居る、身には二世紀程前の着物を纏ふて居る、此異變があつて程なく城に住んでた一人の人が死んだが、口碑の傳ふる所によれば首なし幽霊が現はるゝ時は必ず城内の人が死ぬのが例であると云ふ其物語を尋ねると千八百八十年の内訌に一人の騎士が此城に来て救ひを求めたが



城主は彼を欺いて敵の手に渡したが程なくそれが爲めに首を切られてしまつた、かくて彼の亡魂が今尙祟るのだと云つて居る。

スコットランドにグレンリーと云ふ寂しい村がある、或女が自分の戀人と添はんが爲に其夫を殺害して出奔した、然るに不幸にも彼女は其情人より虐待せられたので鬱々として再びグレンリーの故家に戻つて、晩年迄寂しき一生を續けて死んだが、其家には屢々彼女の幽霊が現はれたと云ふ、或時そこへグランドストーン夫人が尋ねた時彼女の居た室の前に白い霧が出た、始めは烟突の煙かと思つて外を見ると、外には日が輝いて居る、然るに漸次其煙は濃くなつて遂に女の姿になつた、彼女は恐怖から氣絶してしまつたが氣がつくと其姿は消えて居たと云ふ、ラッフル夫人も同じ此グレンリーを尋ねた事があるが、夜

中傍らに燃えてた爐の光に照らされて同じ様な霞が棚引くのを見た、形なき煙は次第々々一つに集まつて遂に人の姿が前に立つた、其折彼女は非常な寒冷を覺えたが驚いて夫を起そうとしたが、宛ら舌が麻痺されたかの様に、どうしも口がきけなかつたと云ふ。

ワイトと云ふ島に、とある夫人が住んでゐた、一夜床に横はつて居る時突然戸が開いて音をさせ乍ら何者か入つて來た、忽ちカーテンが煽り出し夜具迄剥ぎとられたので驚いて救を求めながら起き上ると、ベッドはすぐ覆されてしまつた、後に聞くと其家は幽霊屋敷の名を以て知られて居たので、其室では嘗て或夫人が赤兒を殺した事があると云ふ。

第三の形式に容れられる可きは、其幽霊の出現が常に何人かの死の前兆とな



る場合である。之には病者が媒介となつて故人の靈と感應して斯る現象を起す場合もあるが此實例では有名な話がたんとある。就中ペルリン宮殿の『白夫人』や、ノルフオルクシャイヤの『黒夫人』や、キンゾアの『灰夫人』の話は有名である。『白夫人』は千五百八十九年にジョージ公の死の八日前に現はれ、千六百十九年ジギスムンドの死の二十三日前に現はれ、千六百八十八年、千八百五十年等にも同じ様な現象を起した、傳説によれば此『白夫人』はオルラミュンデ伯夫人の亡靈で嘗て彼女は二人の小供を殺戮した事があると傳へられてゐる。

嘗てブリュスター夫人がスコットランドにスターリング氏を訪ふてそこに滞在してた事がある、或夜彼女は、何處からともなく悲哀の叫びを聞いた、翌日の晝になつて階子段の上に丈の高い女が手摺に寄りかゝつて居るのを見たが、

其人は室の戸を指して靜に階子段を降りて行つた、其指さゝれた室にはウエツダーバーン少佐夫妻が居たが後にスターリング氏に此事を話すと、彼は非常に悲しんで云ふには、昔からの云ひ傳へで此家で幽靈に指さゝれた室に住んでた人は必ず期年ならずして死ぬと云ふ、不幸にも此傳説は眞を傳へて其年にウエツダーバーン夫妻は印度に於て悲惨なる死を遂げた。

又ベリー・ポメロイの城に住んでゐた人がゐた、彼の妻が或日病氣になつたので醫者を呼びにやつたが非常に軽いからすぐ直ると云ふ診斷だつた、彼は其時丁度前の室で其夫人によく似た立派な着物をきてゐる女の人に逢つた由を告げたが、夫は急に青ざめて心配し出した、其家の傳へによればかゝる女の幽靈は既に一世紀も前から現はれて、それが常に家族の人の死の前兆をしてたと云ふ



其夜彼が妻は死んで了つた。

第四の類別に總括せらる可きものは其原因が不明な場合である、露西亞の片田舎の或家に起つた事である、寒い地の事として年の始めに一年中に用ゆ可き木材をすつかり買つておく習慣があつたが、或日高く積まれた重い木材の中から音が聞えるので見に行くと、上からではなく中央から頻りに木が外へ投げ出されて、之が約四十分も續いたので中央に大きな穴が出来た位だと云ふが、遂に其原因は知れなかつた。

ノルマンディーの城に起つた出来事である、千八百六十七年の十月に何處からともなく音が響いたり机が動き出したりしたが、かゝる現象は千八百七十五年に再び起り同九十二年に又反覆せられた、七十五年十月の場合の如きは頻りに

に人の足音がするが降りつもつた雪の上には誰の足跡もない、或日は馬の駆ける音がし室内の器具が踊り出したりする事もあつた。

或貸家があつたが人の頻りに呻く聲が聞えたり叫ぶ聲が響いたりするので借手がすぐ引越して了ふ、或夕方は窓の所に白いものが現はれたと云ふ、或時は同じ場所に白い衣を着た僧侶が十分間も立つてゐたと云ふ、又或折は寝てゐた人がベッドから投げ出されてしまつたり、或時はベッドの下に白髪の人が手を合せながら蹲つてゐたのを見たと言ふ、又或場合には頻りとあちらこちらで名を呼ぶ聲を聞いたと云ふ、かゝる事が數年も續いたが借手は常に變りながら何人の所作とも判明し難いのである。

數多き中より其少量を選んだ如上の實例が既に讀者を倦ませたるを恐れて、



實例は之だけに留めておく、只吾等が靈は死して後如何になりゆくか、もう一度考へて見たい。

ベートーヴェンが残したる一片の樂譜は心なきものにとりては只の記號である、然も一度巧みなる彈奏者の手に渡りては人の涙にも價ひす可き力を有して居るではないか、而して其奇しき數行の曲譜より出づる響きに感嘆の情を捧ぐる限り、作者の心が吾等に活躍せる事を示してゐるのではないか、心ある人の眼にとりては丹青の色に染められたる畫布の前に立ちて、よく原作者が心の活ける事を味識するではないが、ザラトウストラが一篇の無韻詩に、若き人が其心を躍らす限り、作者の精神が其内に溢るゝのを見るではないか、涙ながらに書かれし詩人の歌は心ある人にとりて同じ涙を流さしむるではないか、かゝる

事は吾人の精神が強く動く時何者かに作用す可き永への力を持つて居る事を示すものではないか、吾等が心靈の働きが烈しき時死を越えて尙働く事は考へらる可き事である、殺戮、横死の際に於ける吾人が怨恨の熱情は永く留る可き力を有してはゐまいか、吾等が肉體の生涯を終ゆる時感慨に溢れたる其情緒は、消えんには餘りに強きものではないか、古戰場に勇士が亡魂の今尙彷徨ひ、古城趾に物凄き妖怪の物語り多く、超自然的とも見らる可き現象が多く死に關したる事實に富めるは、凡てかゝる推理の可能なる事をよく説明せるものではあまいか、自分は此篇を終ゆるに當り出來得べき理論を書いて見たいと思ふ。



一 來世の存在

自分は如上の實例に於て此新しき科學が供給し得る代表的材料の大略を云ひ盡したのである、自分は最後にかゝる種々なる現象より齎さる可き結論を書かねばならぬ、然も新しき科學が今なし得るものは寧ろ緒論である、組織的な生觀を得るは將來の此科學が使命に譲らねばならぬ、自分は單に試みの結論を企てたいと思ふ。

死とは何であるか、人類が二千年の思想史は之が出發點で之が歸着點であつた、死が存せざれば人生はない、哲學も科學も死の問題を離れては存在しないのである。吾等は死して後尙活くるであらうか、吾等が靈魂は不滅であらうかかゝる疑問は幾度か發せられ幾度か答へられ、人は時久しくも此謎を解かんが

爲に戦ひ續けた、かくて長かりし此惱みに向つて常に肯定的斷定を與へたるものは宗教であつた、彼は靈魂の不滅を説き來世の存在を説き、樂園の美はしき光景迄細やかに説いた、然し抽象的理論と感情的信仰の上に起てる彼等が信條は果して吾人に向つて明瞭なる確信を與ふる程の力があつたのであらうか、單純なる古への世に生れずして理智の文明に育ちたる民は再び懷疑の眼を此教義に向つて放つたのである、かくて理性の上に立てる科學が起るに當つて人は再び此謎の前に立ちつゝ古き信仰を打破して、科學的見解の許に死後の存在を否定したのである、而して三たび變遷して、實驗と觀察とに基きつゝ、此來世が存在の思想を挽回せんとして起ちたるものは即ち此新しき科學である、げに彼が最大なる使命は死後の存在に對する確證であつた、吾等は前に述べたりし幾多



の實例に於て吾人に潜在せる心靈が能力の偉大なるものあるを認識すると共に  
そが生命の永遠なるを立證せられたのではないか、かくて來世の存在と靈魂の  
不滅が、單に吾人の推理的若しくは信仰的臆測に非ずして客觀的事實なるは、  
かゝる實例より來る必然的結論ではないか、信仰の教へに強ひらるゝ事を喜ば  
ざりし吾等は事實の前に立ちて此眞理を承認せねばならぬ、來世の存在に向つ  
て眞に肯定的の答へを下したるものは在來の宗教ではない、此新しき科學であ  
る、吾等疑ひの國に住める者にとりて此科學が齎らせる人生觀上の影響は些少  
でない様に思はれる、人生の眞相は今や別種の光景を呈出して來たのではない  
か、失はれたる宗教は此科學によつて再び生れて來はすまいか、哲學は又此科  
學に依て力ある實證を與へらる可きではないか、在來の科學が見解も此研究に

よつて一啓發を加へらる可きではないか、げに來世の存在を高らかに否定した  
る科學よりかゝる科學が生れたのは一つのアイオニーである、而して科學を攻  
撃したる宗教が、かゝる科學によつて始めて強き信仰の基礎を與へられたのも  
奇しきアイオニーである、然も古き宗教は現世に於ける行爲の報酬として來世  
の存在を希願し主張した、然し新しき科學はかゝる卑しむ可き報酬の爲め來世  
の存在を吾人に示したのではない、高き意義に於ての死後が存在の思想は此科  
學によつて始めて立證せられたと云ふ可きである。

げに現世及來世、此兩者の境域は劃然として分れて居たが、史筆あつてより  
二千年の今日に於て始めて相接觸して來たのである、ロッチは巧みなる比喻も  
て之を説明して居る、吾等は宛ら「隧道の開鑿者の如く、噪然たる水聲の間に



孜孜として兩端より土塊を穿ちつゝ、今や其距離が近づいて他端に於ける鶴嘴の響きを聞き始めたのである。此喜ばしき響の前に死が如何なる意味を有するのであらう、死は吾人が人生の斷絶ではない、吾等が靈は死を越えたる力である、今やかゝる眞理を教へられたる吾等は、先づ心靈の性質に就て考へねばならぬ、第一に起る可き疑問は現實界に於ける心靈の位置、即ち物質との關係である。

## 二 心靈と物質

「恐らくは物質的世界は絶對なものでない」とはハーバートのジエームスが豊なる知識より云ひ放つた言葉である、この斷定の裏には心靈の世界が獨立的存在を認めそが單に物質の法則によつて説明せらる可きものでない事を意味して

居る、而して自分が列記した多くの心靈現象は之が證明の基礎を形造る充分な材料ではあるまいか、第一に注意せらる可き事は吾人の心靈がよく自然科学の法則に違反せる行爲を行ふ事である、物體の運動は之に外界の力が働かねば起らない事は物理学の主張する處である、然るに何等物理的接觸なくして重力の法則に反しつゝ、机や體が宙に漂ふたり、おのづから帳や裾が煽つたりする現象を如何にして説明す可きであらうか、物理学は又其根本的原理の一つとして物質不可入性の法則を主張する、然も尙椅子にかけられたる外套が、他人によつて手を握られつゝ、ある媒介者の着る所となり、密閉せられたる室に種々のものが入り來るではないか、加之かの手と鑿とを要せず自らフィデアスの藝術を作り、宛ら奇しき魔法者の如く忽然として手を現はし、鈴を振り、火を點じ、物



を破壊するが如き心靈の働きを如何にして形而下の範疇に容れる事が出来よう  
物質法則に反したるかゝる現象は即ち心靈が物質以外に獨立せる事を證するに  
餘りある。

此處に於てか特に注意す可き事實は、かゝる心靈の現象が時間及空間の觀念  
を全然超越せる事である、かの數百哩を隔てたる土地に起れる事を同時に認識  
したり、數世紀以前の人が自働記述に現はれたり、忽然として亡靈が現はれ、尙  
數代に及んで妖怪の活動を見る如きは凡て時間及空間の支配を離れたる行爲で  
ある、而して自分の思惟する處に従へば時間とは恐らく物質界に於てのみ適應  
せらる可き便宜上の概念で、心靈にとつては何等の意味をも齎らさないのであ  
る、多くの哲學者が其形而上學的思想に於て是等の存在を疑ひたるは宜なる事  
である。

而して物質と心靈との關係を説きて斯る思想に反對せる者は主として生理學  
者である、彼等は精神作用が吾人の腦を離れて一日も存在せざる事を主張する、  
換言すれば吾人が腦の器官の廢類と共に精神も其運命を伴にせねばならぬ、か  
くて死に依つて肉體が元素に復歸すると共に再び物質界に向つて何等の働きを  
も加ふる事が出来ないとは彼等の固き主張である、實に吾人が腦髓の或部分を  
取り去ると共に吾人の精神作用が衰ふる事は科學の示す處である、然し之が爲  
に吾人の精神は全然肉體を離れて存せざるものであらうか、新しき科學の主張  
する處に従へばかゝる見解は誤謬である、事實として之を證するものは死者  
の靈が現に人界に及ばず現象である、かの**バイバー**夫人等の自働記載は明かに



死者の靈が尙活ける事を證して居る、かのバラディノー夫人等によりて現はさる、亡靈は吾人が眼のあたりには其姿をさへ現はして居る、唯にそは吾人が感覺によつて知覺し得るのみならず、寫眞に影ずる事は最も明かなる客觀的證明である、然らば吾人が腦は心靈に對して如何なる關係を持つて居るのであらうか、キプリングトンの譬へを借りれば心靈とは太陽の如く腦は其色を示す可きプリズムの如きものである、光線の七色はプリズムの破壊と共に消ゆる事は事實であるが、プリズムの破壊は太陽の消滅を意味してはゐない、吾人が心靈は腦なるプリズムを通して作用するのである、故に其プリズムの破壊即ち吾人が肉體の死とは唯心靈の作用を物質界に現はす可き器械の破壊で心靈それ自身の消滅ではない、心靈が永遠に其生命を保持す可きは日輪の光々たるそれと同

一である、腦とは心靈の作用を表現す可き器官で、物質は之が爲に存在せるものである、ジエームスが前述の言葉は此處に於ても意味がある、物質世界を唯一絶對と思惟せる見解は全然誤謬と云はねばならぬ。

然も在來の科學が研究は腦の働きの關しても甚だ不充分である、抑も吾人が感情、思想を外界に表現するものは筋肉の運動である、而して此運動を惹起するものは腦の働きである、斯くの如きは生理學の教ゆる所であるが、さらばかゝる腦の働きの何によつて衝動せらるゝか、其本原は何であるか、不幸に科學はかゝる原因の問題に對しては沈黙である、げに在來の科學が問題の對象となつたものは、凡て結果であつて原因ではなかつた、かの化學は物質を形成す可き元素の結合に關して複雑なる知識を吾人に與へて居る、例へばかの水が水素



及酸素によつて構成せられ、それが二と一との割合に於て結合せらるゝ事を示したのは化學の功績である、然しかゝる結合變化を來す可き力は何であるか、化學は茲に於て全く無學である、げに從來の科學とは一切のものゝ結果に對する研究で、其結果を産出せる原因は不問に附した所であつた、而して心理作用の道より其原因を探らんとするものは此新しき科學である、物理的現象より其原因を尋ねんと努力せるものは電氣物質學である、而して此兩者は如何なる點迄近きつゝあるか、自分は心靈と物質との問題を更に明にせんが爲に、物質主義を批評しつゝ、最近に於ける物質論を書いて見たいと思ふ。

### 三 物質に對する最近の科學的見解

神、自由意志及靈魂不滅の思想を否定して物質萬能の福音を宣言したる人に

於て、蓋しイーネーナーのヘッケル(Ernst Haeckel)が名は今尙吾人が耳に残つて居る、此第二十世紀の劈頭に於て發刊せられたる『宇宙の謎』の著者の痛切なる思想が、如何に形式的信條に疲れたる歐洲の民に取りて歓迎せられたるかは、彼が六十歳の誕生に於て彼等より贈られたる祝辭と花束とを以て埋められたと稱するのを見ても明かである、彼は博學なる智識と流暢なる文章とを以て、生物學の研究に立脚しつゝ、人類が自然界に於ける位置を説きかゝつて近世の科學によつて證明せられたる物質及エネルギー不滅の法則を以て此宇宙が本體律(Law of Substance)とし、一切の現象の根元を是に歸着せしめて、所謂彼が一元論(Monism)の人生觀を建説した、彼はかくてあらゆる心靈の作用を物質の様式に容れ、かくて宗教が心物二元を容るゝ思想を排斥し其本體律を以て一切の



ものを解釋せんとし、堂々たる物質主義を主張した、在來の頑迷なる信仰に對する痛棒として又科學的智識の啓發として彼が書は吾人の一讀に價す可きものである、然し彼が思想は時代の過度なる反抗心として又多くの誤謬の存する事を免れなかつた。

彼は其一元論の基礎を物質及エネルギー不滅則の上に建設したが、不幸にも彼は物質に關する智識に於て甚だ缺くる處があつた、抑もエネルギー不滅の法則を以て人生を説明す可き論據とする事は甚だ早計ではあるまいか、エネルギーの不滅とは人生を支配し指導する力を意味するのではない、それは單にエネルギーの總量の不變を意味するのである、吾人はかゝる量的不變を以て人生を説明し得べきであらうか、吾人が思惟し得べき答は否定である、而して物質

不滅則に對しては更に多くの批評を受けねばならぬ、彼が『宇宙の謎』を著はしたる後、科學は物質に關する思想に於て急激なる進歩を遂げた、げに物質不滅則は近世科學の重大なる根本思想の一つであるが今は此法則に對して疑問を挿む科學者さへ出來た、佛のル・ボン (Le Bon) は其代表者である、彼は精密なる實驗的研究により『物質の進化』なる一書を著はして物質消滅の新説を發表した自分は茲に趣味ある彼が研究を紹介する違がない事を残念に思ふが、只此處には彼が實驗的研究の結論が物質消滅論であり且つ最近に於て彼はエネルギーも不歸の靜止に終る可きを主張して居る事を書けば充分と思ふ。

よしル・ボンの説に尙加ふ可き批難があるにせよ物質に對する觀念は、千八百九十九年キェリー夫妻 (M. et Mde. Curie) がラヂウム (Radium) の發見以來、



根本的に改革せられ放射能の研究が進むにつれ舊思想は殆ど全く打破せられてしまつた、嘗て原子は物質を構成す可き最後の元素であつた、如何なる方法を用いてしてもそれ以上破壊し分割し能はずとは此原子に與へられたる性質であつた、然るにクルツクスの真空管内の放電とレントゲンのX線發見を端緒としてトムソン、ベックエレル、キュリー等の精密なる研究と卓見ある理論とに依つて遂に放射能が原子内に起る變化を示す現象なる事を實證し、遂に原子壊散論(Disintegration Theory)が主張せらるゝに至つた、而してかく壊散せられたる微粒子は即ち電子(Electron)である、さらば一切の物質の根元たる此電子とは如何なるものであるか、それは即ち固液流三態の何れにも屬せざるもので陰電氣の性質を帯びたる電氣放射に外ならぬ、而して電氣とは何であるか、それはエーテ

ルの波動に外ならぬ、茲に於て一切の物質を構成せる電子とは、既に物質に非ずして運動せるエーテルの波である、今自分が書きつゝあるペンもインクも紙も之は物質にあらずして電氣放射の集合に外ならぬ、即ち眞の意味に於て、物質なるものが世界に存在せずとは最近の物理学が吾人に提供し得る最終の結論である、然り吾人が所謂物質とはかゝる電氣即ち一種の力の現はれに外ならぬ既に物質の性を失へる力が、一切の根元とすれば、物質の上に基礎を建てたるヘッケルが一元論は遂に其價値を失つて來た、茲に於てか、かゝる物質の根元は心靈と甚だ密接なる關係を生じて來る、此兩者に關する形而上學の見解は別として、多くの科學者は之に向つて種々の假説を立てた、かのクルツクスは精神感應の作用がエーテルの波動に基ける事を推論した、抑も電氣が必ず陰陽の



兩極を緊要とする事は明かなる事實である、而して物理學は原子が何等かの配列の法則に従へる陰電子の集合で之に種當可すき陽電氣を以て圍まれつゝある事を教へて居る、而して此陰電子に關しては吾等は多くの知識を與へられてゐるが、陽電氣の性質に至つては物理學は全く沈黙である、此陽電氣に關する研究こそは將來の物理學が議論の中心であらう、而して未だ神祕の裡につまれて居る此陽電氣に對してキアリングトンは大膽なる一つの假説を立てた、人生てふ活ける力が即ちその陽電氣であるとは彼の主張である、此力が物質を圍み、それが内に含まるゝ陰電子の平均を保ち且つそれを支配しつゝある、物質は陰電氣の現はれである、人生を動かせる力は陽電氣の現はれである、心靈とは要するにかゝる力ではあるまいか、此巧みな假説が如何なる價值を有するかは今日に

於て未結の問題であるが、自分は兎も角心靈の現象が電氣現象と密接なる關係を有せる事を主張したいと思ふ、自分の思惟する處に従へば電氣的心靈現象の研究は必ずや吾人に人生てふ長かりし疑問を解く可き一つの糸口を與へると思ふ。かのパラダイノ夫人が昏睡状態に於て、明かに檢電器に感應し、黒紙に包まれたる種板に、放射能の作用によつて手の型を寫し、光を發する物體が媒介者の周圍に漂遊せる事等は注意す可き現象ではあるまいか、既に所謂物質なるものゝ世に存せざる事を知りたる吾等は其根元たる力と、吾等が心靈の力との關係に對して研究を重ねる事は須要の事と思惟する、自分は最後に以上の事實及理論に基きて此科學が立て得べき人生觀を概説して見たいと思ふ、然し之からは哲學的領域である、然も自分の考へを基にして大膽に書くのであるか



ら其取捨は讀者の自由である。

#### 四 科學的唯心論

吾等が眼に映ずる物象の世界とは現實の世界ではない、吾等の感覺は遂に其眞相を知る事を許されてゐない、吾等は木の葉の緑なるを見、花の紅なるを見る、然もかゝるものは決して此世に存在してはゐない、色彩を有せるかゝる物質が存在するにあらずして、それは單に色の感覺を起すエーテルの波動の長短遲速の作用に外ならぬ、所謂物象の世界は假の世界である、眞の世界ではない、それは只一つのシムボルである、それを美と觀じ醜と感ずるは吾等自身の心の裡にある、既に此世界の眞相が物質に非ざる事を知りたる吾等は、物質に従屬すべき位置にあるのではない、此世は吾等自身の觀念の裡にある、吾等は自己の信

念に基きて此世を造り變ず可き力を賦與せられてある、世界は外にあらずして吾等が裡にある、所謂物質界は吾等が心あつて始めて認識せられるのである、吾等の心が主にして彼等は客である、茲に於てか吾人に残れる唯一の人生觀は唯心論である、然り科學的唯心論、これは物理學と今自分が説き來つた新しき科學とが齎らせる最終の結論である、世界は吾等が心を通して開展して來るのである、此世を美と觀じ此世を完全にすべき力を興へられたるものは吾等である物質とはエネルギーの現はれにして之を支配し指導する能力は即ち吾等自身の心にある、人生とは如斯ものである、かくて科學的樂天主義の福音は、吾人にとりて可能なるが如くに思はれる。

況んや吾等が心靈の力は無限である、吾等に潜在せるかゝる能力は適應せる



機會の許に、驚嘆す可き力を現はし得るのである、吾人が列擧した實例は凡て此事を説明せるものである、一切の人は大なる天才たる可き力を賦與せられてある、唯かゝる潜在せる能力を表現す可き機會が與へられないばかりである、而して今尙進化の途上にある吾等が、將來に於て此潜在せる能力を用ゆ可き時期の來る可きは、最も可能的なる推論である、吾等が頭腦の甚しく發達せる時吾人が驚きたる幾多の奇異なる實例は普通なる日常の現象となり得べきである吾等の將來の歴史とは、心靈が事業の歴史であらう、げに人類は其心靈の力に於て希望ある發展の未來を有して居る。

世界に於ける心靈の位置は斯くの如くである、然らば物質は何が爲に造られたのであるか、自分の解する所に從へば、心靈が具體的表現の爲に存せる器官

である、而して心靈と物質とは其根源を一にせる兩面の世界である、物質を構成せる力と人生を支配せる力とは、かくて形而上學的意義に於て等しく同一の宇宙が實體より出でたるものである、而してかゝる實體の一部たる吾等が心靈を外界に表現せんが爲に物質は存在するのである、而して自然界に於ける法則とは、要するに宇宙が意志そのものに外ならぬ、かの微細なる原子にもかゝる意志は現はれて居る、かの宏大なる星の運行にもかゝる意志は流れて居る、一切のものは宇宙が心靈の影像である『自然は内在せる神が出現の啓示である』と云つたロッチの言葉には深き真理がある、此世界とは要するに宇宙の靈的意志の表現に外ならぬ、此處に於て自分には萬有神論 (Pantheism) が最も深き意義を有して居る様に思はれる、而して自分には此處に、宗教、哲學及科學が隔合



せらる可き唯一の最終點がある様に思はれる。

而して宇宙の實體の一部たる吾等に死は如何なる意味を有するのであらうか  
肉體が死とは心霊を表現す可き器官の死である、而してかゝる器官の死は宇宙  
の實體が死を意味せざる事は明かではないか、死とは單にエネルギーが變化の  
一現象である、それは唯物質界に於てのみ生ぜらる可き現象である、獨立せる心  
霊は唯死に於て其器官を失へるばかりである、況んや時と處とを越えたる心霊  
に死は何等の意義を有せずして、残れるものは唯永遠なる生命である、吾等は  
死によつて宇宙の本體に復歸するのである、そこには時間なく空間なく唯永劫  
の安住がある、こは人生に與へられたる最も光輝ある歸趣である。

白樺第一卷第六—七號掲載—千九百十年—

## メチニコフの科學的人生觀



目次

緒言

一 人性に存する不調和に就て

一 緒論

二 生物界に於ける調和及不調和

三 人類の起原

四 人性に存する不調和

1 消化器に存する不調和

2 生殖器に存する不調和

3 種属保存の本能に存する不調和

4 自己保存の本能に存する不調和

二 宗教及哲學的人生觀

一 宗教的解釋

二 哲學的解釋

三 老衰に關する科學的研究

一 科學と人生

二 老衰の原因

三 動物の年齢



#### 四 死に関する科學的研究

一 死の研究

二 自然死

三 生命の延長

#### 五 個人と社會

一 生物史上より見たる個人と社會

二 ゲーテとフアウスト

三 結論

### メチニコフの科學的人生觀

#### 緒言

メチニコフの書二冊に餓えた心を満されて、赤城山を下りてからやがて三年にもなる。静かな湖畔の綠陰に新なる人生觀を繙いて、渴いた喉を潤ふした一歳の夏は、自分には離れ難い思ひ出である。蟬を自然死の比論に用ひてある處を讀んだ時、弱い羽をひろげて蟬がメチニコフの本に留つたのも忘れられ



ない記憶になつた。火を慕つて自らを殺す夏蟲を、自然に於ける最も不調和な現象の一つに數へてゐるのを讀んだ時、夜なく其本を照した燈火の許に、いつも此哀れな自然の慘事が行はれるのをつらく思つた其折の感じも、今は去り難い追憶になつた。沼田あたりから此赤城を山越しに足尾あたりに行く旅人が爐によつて年老いた體を温めてるのを見た時、其體が蝕細胞の浸害に亡びつゝあるのを聯想して、つくづく其白い髪の毛を眺めた事も思ひ出多い回想になつた。暑い此頃の夏の日に自分と共に水戀ふ人のあるのを想つて、茲に獨創ある彼が科學的的人生觀を祖述する期を得た事を嬉しく思ふ。

エリー・メチニコフ (Elie Metchnikoff) は千八百四十五年に小ロシアの一小村に生れた人である。特に微菌學者として秀で、彼が白血球に存する蝕細胞

(Phagocyte)の研究は、科學界に彼の名を重からしめたもので、炎症説 (Theory of Inflammation) 及免疫説 (Theory of Immunity) は實に彼の創説にかゝるのである、彼は師パストールの名をつぐ可き人で、若い科學者で巴里の地を踏む者は、先づパストール研究所 (Pasteur Institute) を音づれてメチニコフを訪ふ事を一つの希ひにしてると云はれて居る。

人類に縁遠い下等動物の顯微鏡下の研究の如きは實に人生の大なる問題とは何等の關係もない無益な労働の如き觀がある、然し彼にとつては動物學微菌學の細微な研鑽は只の學術には止まらなかつた、彼は遂に四十有餘年間の敬虔な研究の結果、科學的立脚地から人類が古くより悩むだ老病死の問題を解釋して此人生に大なる希望を與へ、積極的樂天主義の福音を宣傳したのである。千九



百〇三年に出版された「人間の性」(The Nature of Man)は彼が一身を獻げた其研究の發表で、越えて千九百〇七年に、其追補とも見る可き「生命の延長」(The Prolongation of Life)を出版して其新人生觀を更に詳論したのである。宗教及哲學的方面を離れて科學が人生問題に觸れた事は日尙新たである、従つて其細目には尙改竄の餘地ある事は明かであるが、彼が四十年間の倦まざる科學的探求の結果は、一つの組織的的人生觀として、長く吾人が尊敬に價し、熟讀に値す可きものと信じる。彼の人生觀は如上の書二冊の内に主として窺ふ事が出来るが、數多い論材を縮少して其骨子をのみ書く事は、事實に基く科學的議論に對しては怨みある事であり又豊かな趣味を削ぐ事である、只彼の人生觀に未だ新しい人々に對して、其旨を組織的に闡明する事が出来たなら自分の希ひは足りるのである。

のである。

一 人性に存する不調和に就て

一 緒 論

吾々を圍繞する自然が人類に大なる恩寵を與へて居るに拘はらず、人は常に幾多の苦痛に面接して現し世の不幸を嘆くのである、老病死の事實は解けざる永劫の謎として人は人生の標準を求むるのに苦しまねばならない。望みない者はかくて厭世の思想に陥り隠れ家を求むる者は神祕の致へに逃れねばならない十九世紀の哲學が著しく厭世的色彩をおびて居る事は明かである、然し吾々はいつ迄か人生の痛ましさを呪つて懷疑の裡に此世を渡らねばならないのであら



うか、此苦悶を脱却し救済せんが爲に、今や新信仰の要求は人類が心底の叫びとなつて居る。

一切の人生の問題は人間の性に萌して居る、時代々々の宗教も哲學も凡て之を中心として廻轉して居る、死の問題も人性を離れては存在しない、道德の標準も人性の善惡に合理的解釋を求め得べきと考へたのである、人性に對する態度はやがて其時代の思想史を産んだ力である、従つてそれに對する見解は時代思潮の特色を形造つて居る、今の世の人が肉體の重荷に悩み疲れて、此世を厭ひ人生を嘲つた其笑ひと、二千年の古へ希臘の民が此人生を喜び讚えて舞ひ樂しんだ其笑ひとには、大きな徑庭がある、人の肉體は彼等にとつては汚れた卑しいものではなかつた、人性そのものは彼等が盡きざる喜の泉であり、其高調

は達して遂に人の形に神をさへ認めて、あらゆる美と力とをそこに與へたのである、希臘美術は其よき表現に外ならない、美麗なる容貌、完全なる肉體、それは凡て彼等が理想信仰を體現したものである、此藝術を哲學に移す時吾等はプラトーンに接するのである、彼の哲學が如何に人性の美を説き、悦ばしい理想を述べたかは人の知る處である、かく人性と自然とは古き哲學の最も重んじた處であつた、ストアックの哲學は自然の教へと云はれて居る、「自然をして汝の指導者たらしめよ、幸に活かるとは自然に活かると也」とはセネカの言葉である。エピキュリアンも亦喜悅は自然的善なるを説いて、自然の調和を讚えてゐる、かく自然から與へられたるものを尊んで、其内に合理的道德の標準を求めた人は後代に於ても幾人もある、「道德とは人間の性質に關する科學なり」とは十八



世紀の佛の思想家ドルバツハの言である。キルヘルム・フォン・ジーボルトが「人の究竟理想とは人性を出來得る限り調和的に完全に發達せしむる事にあり」と云つたのも同じ思想である、近くはダルキンが善を定義して「與へられたる事情の許に完全なる能力を維持して、各人健全に活くる事なり」と云つたのも凡て希臘思想の發現と見る可きである。かく凡ての時代の合理的哲學者が道德の基礎を人生そのもの、上に置いて、それを善と見完全と信じた時、之に反したものは宗教の教理である。

曾て肉と靈とが調和せるものとして考へられた思想は、印度と猶太に榮えた宗教によつて残りなく打破せられてしまつた。吾等は靈肉の二元よりなつて、讀ふべきものは獨り靈のみで、肉はあらゆる罪惡煩惱の源であると思惟せられ

たのである、慾を矯め情を制して後にこそ誠の幸福が得られるとは彼等の信念である、今尙印度の山野に肉體の汚濁に堪えかねて終世を苦行に送る僧侶がある。佛陀の教へに従へば、人生は不淨を以て滿ち現世は無常を以て充ちたものである、基督の教へに従へば、飢餓に戦ひ、歡樂の慾に闘ひ特に性慾を禁壓する事は人生の目的を達す可き道である、彼等の信徒の多くが穩遁的生活を營むのも一つには世の情に汚れざるとの爲である、昔時アゼンの町にそゝり立つ白色圓柱の許に此人生を踊り樂んだ民は、かくて亂れたる髮蓬々として衣すら纏はずシリアの高原を彷徨ひ歩いたのである。聖アントニーは老ひて尙決して足をすら洗ふ事が無かつたと云ふ、かくて希臘に榮えた藝術は基督教の急激な傳播と共に又昔の潑瀾たる面影を止めなくなつた、寺院に立ちてしばしステイン



ドグラスを眺め壁畫を仰ぐ時、宛ら人類は衰頹し、血液の貧少に惱める如くに思はる、青ざめたる聖者、歪める殉教者、脊せたる處女、萎める穩者、苦しみつゝ血を流せる基督」とは佛のテインが中世の繪畫に對する感想であつた。

然し乍ら此衰運を挽回して再び起つたものは所謂文藝復興期の藝術である。

ミケランゼロと云ひレオナルドと云ひ凡て是等の藝術家は一方に於ては科學者であつた、彼等の現はした活ける力と美とは、實に藝苑に無量の價値を與へたものと云はねばならない。此等しき運動を宗教に於て起したものはルーテルである、「凡ての與へられたる自然の力を完全に發達せしむる」事は彼の教義の要旨であつた。

かく人生を完全なものとするにせよ、汚穢せられたものとするにせよ、凡て

の問題は人性を中心としてそこに合理的道德宗教を立て様としたのである。而して人性より起る主な問題は嘗て佛陀が疑を懐いた老病死の問題に外ならない宗教と云ひ哲學と云ひ一切の人生觀は此苦悶に對する解釋である、然し彼等の信仰哲理は果して人生の問題を解き得たであらうか。抑も人性とは既に完全なものにして、そこに確固たる道德的基礎を建て得たであらうか、果不淨煩惱を以て滿ち、そこに何等の價値をも見出し得ないであらうか、科學はかゝる人生の根本問題に觸れる力が無いと云はれて居る、然し在來の超自然的な教理を打破し去つた科學は此問題に對しても新なる解釋を下さねばならない、程遠からずして科學が人生問題に密接に觸れ來る可き時期は來らねばならない、古くより人の惱むだ老病死の問題に對して、如何なる程度迄科學が解答を與へ得べき



かを試み、それによつて人生を解釋し、其理想を明かにする事が此人性の研究に基ける科學的的人生觀の目的である。

## 二 生物界に於ける調和及不調和

人性の問題は要するに人性に存する調和、不調和の問題が基になる、調和とは自己の生活と外界との調和を意味するのである、生物中其種屬の滅亡を招いたものは彼等が外界に對して不調和であつたが爲である、今尙發掘せられる化石に見られる巨大な羊齒や關節動物は、周圍と不調和の爲に亡びた石灰紀時代の遺物である、然し周圍の境遇に適應してよい調和的生活を示してゐる生物の例は甚だ多い、其最も美しい且つ驚く可き例として蟲と花との關係を述べたい。

凡そ五十年程前にメキシコから熱帶地方に植ゑつけた蘭花の花があつた、之

はヴァニラ (Vanilla) と云つて其實は最もいゝ香料として知られて居る、然し移植した當時は同じ花は咲いても肝心の實がならない、培養者は此不思議な現象を色々考察した結果、雄蕊と雌蕊との間に一つの膜があつて之が授胎作用を障げてゐる事が分つたので、人工的に其膜を破つて始めて實を得る様になつた。然るにもとあつたメキシコでは人工を借らずに完全に授胎作用が行はれて居る、而して其作用を完からしむるものは其地方に住む特種の小さな蜜蜂 (*Melipona*) 及蜂雀の働である事が分つた、熱帶地方では實を結ばなかつたのも唯そこに媒介者たる蜂と鳥とが居なかつた爲である、之は兩者の間に美妙な調和がある例と見ていゝ。抑も花は其花粉を運ぶ爲に主として蟲の働きに待たねばならない、蟲も又其食を求め爲に花を訪ねねばならない、花にとつてはなる可く多



くの花粉を固く蟲の體に附けたい、之が爲には花瓣に長く留つてもらふ必要がある。或蘭花の花になると蜜が中々取りにくい處にあるのも之が爲に外ならない。又或花では一種の液體を分泌して蟲の羽を濡らして長く留まらせる働をするものもある。又或蘭は彈力作用で蟲が觸れると花粉をそれに投げる様になつてゐるものもある。是等の例は自己繁殖の爲に如何に外界に向つて調和ある性を持つてゐるかを示すものである、又調和ある性を有してゐる動物の例として土の中に住む胡蜂の例を挙げたい。

普通の蜂は主に群をして生活し蜜を蓄へ自ら巢を守つて子を養つて居る、然るに此胡蜂 (Fossorial Wasp) は普通の蜂とは全然性質を異にして、親は卵を土の中へ深く埋めておくが、孵化した幼蟲は決して母を見る事がない。母蜂は其

幼蟲を育てる爲めに前以て蜘蛛、蜂蟻の類を食物として穴の中に入れておくのである、然も其食物となる是等の蟲は或特種のものに限つて居る、即ち此胡蜂は食物選擇の本能を持つてゐると見る事が出来る。のみならず長い間食物を土の中に入れておけば腐敗する恐れがあるので、此胡蜂は或る防腐劑を其食物たる蟲の體に注入するのである。尙驚く可き事には其食物は決して死んでゐるのでなく麻痺させてあるのである、此蜂が餌を捕るや否や、本能に従つて足の運動を司配する神經中樞に針を入れる、若し體の軟かでない場合例へば米象蟲等の場合には必ず第一と第二との足の間の皮の薄い針を刺す、かくして捕はれた蟲は凡て麻痺されて可成長い間死なずに保たれるのである。親蜂はかゝる微妙な方法によつて食物を子の爲に蓄へ、之によつて幼蟲は完全な成長をして冬を越し



春を待つて成蟲となり外に出るのである、斯くの如きは生物界に存する最もよき調和の實例である、然し自然には同時に不調和な幾多の現象がある。

同じ蘭花の花でも發育不完の花粉があつて、之が爲に完全な授胎をなし得ないものがある、又昆蟲の方でも甚しい不調和の例となるものがいくらかもある。ダルキンの書いた例によると膜翅類に屬する非常に小さな昆蟲には、一つの花粉塊よりも小さい爲、蜜を求めて其まゝに動けなくなつて不幸の死を遂げるものがある。或てん、蟲は蒲公英の蜜を取る爲に其花瓣に乗ると、其花瓣は弱い爲にすぐ蟲と共に散つて落ちて了ふ、かくて其昆蟲は無益な労働を何度となく続け遂に何等の蜜をも得ないで終るのである、又毛蟲は蝶に羽化する前に繭を作つて身を防いでゐるが、之が一旦破れると必然死を免かれないのに彼等は破

れた場所を縫ふ術を知らない、又生物中には子孫を愛する本能に缺けたものがある、兎の如きは往々吾子を殺して之を食ふ事さへあり又食物を與へない爲子が餓死する場合もある。

次は又性慾の紊亂から來る不調和がある。ユーバーの言によると若し雄蟻の數に對して雌蟻の數が少ない場合には彼等は其性慾を満足させる爲に労働蟻を強姦する、労働蟻は生殖作用の器官が不完であるから、之が爲に死を遂げるのである。哺乳動物中に往々見られる手姪の如きも性慾上の不調和な現象と見ねばならない。以上の如き性慾は死を導く事が稀ではあらうが、中には更に恐る可きものがある。

夏の宵に燈火を慕つてくる蟲が、自らの身を火に投じて死を招く事は、吾々



の常に目撃する所である。かゝる昆蟲は主として夕暮に出る蟲で、農夫等は其習性を應用して、夜間火を田畑にともして多くの害蟲を殺す手段にさへしてゐる。抑も彼等は何故に火に入つて己れの身を焼く程の不調和をするのであらうか、夕暮に飛び廻はる蟲は主として雄で、雌は概ね草や木の間止つてゐる、此事は火に入つて死ぬ蟲を調べても分る事で、百姓が往々澤山な蟲を篝火で殺しても、死ぬのは雄が多い爲に依然として害蟲の繁殖に苦しむ事がある、此事實から推測すると火が彼等雄の性慾を喚發するので、彼等は其火の中に雌の居る事を信じて集つて來るのである、即ち火を認めると性慾の本能が働いて、輝く光に引きつけられて愚な死を遂げるのである、此事實は或種の昆蟲の雌が雄を呼ぶ爲に自ら光を放つものがあるのを見ても分るのである。

かく自然から與へられた本能の爲に、死を招く事は最も痛ましい不調和の一例と見ねばならない。然しかゝる不調和の本能が、いつか消える事のあるのは明かな事と云つてもいい、例へば子孫を殺す事を意としない動物があれば、いつか其種屬は絶えねばならない。故にかゝる自然界に存する不調和は今後漸次失せて、不用器官の衰頽と共に有用な部分の益々發達する事は自然の趨勢である。

生物進化史が始まつて以來、調和あるものは今に長らへ、然らざるものは永への消滅を受けた、かの調和ある性を持つて居る蘭又は胡蜂の如きは實に此世を樂しみ得るものと云はねばならない。密を求むれども常に地に落ちて得る事が出來ず、本能にかられて火を慕つて自らを殺す彼等昆蟲に、若し心があるな



ら自己の運命を啣ち存在を呪はねばならない。

抑も人類は等しくかゝる嘆きを持つてゐるのであらうか、果吾々は周圍に調和した性質を持つて居るのであらうか、此調和不調和によりて人生の思想は變らねばならない、若しあらば如何なる點にあるのであらうか、人間の性の研究はやがて人生の幸福、理想を規定する上に於て有力なる方針を與へるのである。

### 三 人類の起原

吾人は遠い祖先を生物界に持つて居る、従つて人生を理解する爲には其由來を知らなければならぬ、各個々の生物が凡て神の意志によりて創造せられたとは嘗て宗教が吾人に教た處であつた、然しダルキンの「種の起原」はかゝる思想を根本的に打破して、人間が進化によつて出来たものである事を明かにした、

比較解剖學の精密な研究は種々な點で此事實を示してゐる、種の關係に就て齒は最もよい證據物であるが人間と高等猿類との齒系には殊に著しい類似がある。又他の一例は薦骨(Sacrum)で、人に類した猿の五つの薦骨の數は人のそれと全く數に於て符合して居る。又頭蓋骨も四肢も多小の差こそあれ其類似を否む事は出来ないのである。特に注意すべき事はハックスレーの研究によると、人類と高等猿類との關係は、高等猿類と下等猿類との關係より遙か密接である事である、兩者が其種に於て同一に屬す可きである事は更に又筋肉や内部の構造にも現はれてゐる、腦や消化の類似も今や争はれぬ事實で、例へば人の盲腸は蠕蟲狀の附屬物を持つて居るが高等猿類も等しく之も持つて居る、然るに下等猿類には之が無い。



管に解剖學上よりのみならず發生學は益々人類の起原を明かにしてゐる。胎盤(Placenta)は哺乳動物の類別には大切なものであるが茲にも亦人間と高等猿類との間には甚しい類似がある、臍帶(Umbilical Cord)は嘗て人間にのみあると信じられて居たが尙吾人に似た猿猴にもある事が知られた、殊に胎兒の如きは判別に苦しむ程である。

加之、古生物學上の發見が更に此事實を強めて居る、千八百九十四年にジャバーで發掘せられた猴の化石は多くの解剖學者から人間と人に類せる猿との中間に位してゐるものであると云はれて居る。

而して人類の起原に更に有力な證據を與へたものは血清上の試験である。今人の血をとつて暫くおくと其上に透明な液が出る、之が即ち血清である、今此

人血清を注射した或動物例へば兎の血をとつて人兎血清を作つて見ると、只の兎血清とは性質の異つたものが出来る。今此人血清と人兎血清とを混ざると忽ちに沈澱物が出る、今牛より牛血清をとつて之と先の人兎血清とを混ざると何の反應も起らない、然るに高等猿類からとつた血清と人兎血清とを混ざると沈澱物が生じる、此事實は同種間及相接近してゐる種の血清は互に沈澱物を生じ、異種間のものは何等の反應をも起さない事を示してゐる、例へば鶏(TOwl)と鴿(Pigeon)との血清は沈澱を生ずるが故に類の相近き事を知り、鶏と馬との血清は何等の反應も起さない故に種の關係の相遠い事を示して居る。多くの學者は此血清上の試験から、人間が、ゴリラ、チンパンデー、或はオラングウタン等と相近い血縁上の關係を有してゐる事を示したのである。かく人間が猿猴から由



來したと云ふ事は人性の問題にとつては緊要な材料を與へて居るのである。

然らば如何なる過程を経てかゝる猿が人間になつたのであらうか、是に對しては知識はまだ不充分で只一般的な假説を造り得るのみである。即ち生物の進化が長い年月に漸次行はれたる事であるが、又種の進化が時として急激な變化によつて行はれる事があるのを忘れてはならぬ、ド・フリヌの有名な月見草 (*Enothera lamarckiana*) の研究は、よく新種が突如として現はれる實例を示して居る、之は變化説 (Mutation Theory) と云つて、人間も之と同じ様に急激な變化で其祖先より非常に發達した頭腦を以て生れ、それが生存競争に堪えて現存したものに見らる可きである。異常な計算力を持つてるので巴里で有名になつたジャク・イノーディと云ふ田舎者は其一例である、彼にとつて六或は七個の數

に二個ある數を乗けたものを計算する事は、僅か二分を要したばかりであり又根數を見出す事は容易だつたと云ふが、彼の父は無學者で、彼自らも幼時は牧童として暮し、此奇才が突如として現はれたのは二十歳の折だつたと云ふ、此若いジャックは恰も月見草の新種が急に出來たのと同じ過程を経て異常な才能を得たものと云ふ可きである。之と等しく最初の人間は高等猿類から生れた非凡な性質を有する子であつたのではあるまいか、この假説は、よく人間と高等猿類とが成年期に於てよりも胎兒及幼年に於て遙かに似た處のある事や、人が發達した頭腦を以て生れたが爲に猿類に於て發達してゐる或る器官が、人間に不用として只根跡を止めて居る事實などを説明してゐるのである。

以上は體質上よりであるが、又性質上よりしても人間が猴屬起原である事が



云へる、吾々が異常な心的状態に入る時往々にして、動物から繼承した性質を現はす事がある。恐怖の心理的研究は、多くかゝる實例を供給してゐる、猿猴類は敏速な運動や強大な力を有するに拘はらず、時として臆病な恐怖の情を現はす事がある、幼年に於て周圍に對する無益な恐怖心は此性質を繼いだもので、恐怖の最初の衝動たる逃走は、生命を救はんが爲に主として用ひられた動物の本能が遺留したものである。又恐怖の際に於ける戦慄も同じで、危険が近い時に犬や猫が皮膚の筋を逆立てる事は常に目撃する處である、人に於てはかゝる場合には毛の根にある筋肉が収縮するのである之が甚しい場合には大腸又は膀胱に収縮を起させる、かゝる場合に往々排泄物が不意に出る事があるが之は又動物の性質の跟跡を留めたものである、チンパンデーの如きは恐怖の際にかゝ

る排泄物を出す事は往々あるが、かゝる汚物を排出する事は、敵を防禦する手段として動物間には生存競争上大に必要であつたのである。又恐怖の際に匿れた本能が再現する事がある、多くの動物は本能的に游泳の力を持つてゐるが之を缺いてゐるものは猿類と人間とである、然し恐怖の際に祖先の此本能が再現して、嘗て游泳術を知らなかつた人が容易に泳ぐ事が出来た場合がある、又啞者が獅子を見た時の恐怖で急に口がきける様になつた例もある。

恐怖に關連して特に著しい事實はヒステリアの現象である、就中睡遊 (Somnambulism) の際に人は往々奇妙な性質を現はす事がある、覺めて後更に記憶しない行爲を睡眠中に行ふ此睡遊の例は甚だ多いが、かゝる間に時として猿猴類の性質を現はす事がある、嘗て或睡遊症にかゝつた一人の患者が居たが夜一時



頃急に起きて室から飛んで庭に下りた、傍らにあつた水治療室にかゝつてゐる梯子を見つけるや、之に登り始めて輕快な動作でそこを上下してゐる、彼は時々立止つてかゝへてきた枕を、宛ら子供でも取扱ふ様に揺つたり接吻したりする、又或夜には庭の中を大急ぎで馳け始めて、水のタンクの塔を見つけるや、すぐ其梯子に登り出した、其隣りに浴室があつたが梯子からそこに飛び移つて遂に屋根に登り、其狭い頂きを巧みに走つて危険な動作を誤りなくしてゐる、かゝる事が凡そ二時間も續いてゐたと云ふ、是等の行爲は決して日常生活には見る事の出来ないもので、之は吾々祖先たる猿類の森林に於ける敏速な運動が、かゝる病氣の間に再現したものではあらずまいか、かゝる性質よりしても人間が遠い起原を動物界に有して近い關係を猿猴に持つてゐる事が云へる、かくヒステリ

アに屬する變態的心理現象の多くは、生物學上の關係より説明し得らる可き事が多いのである。

かく體質に於ても性質に於ても人類が特に猴屬起原を有してゐる事は明かな事實と云はねばならない。而して人類は長い進化の歴史によつて多くの特種な性を有してゐる。秀でた頭腦の發達は、生物界に於ける吾々の境遇を變へ、かくて多くの不用器官は只前代の遺物として吾々に残つてゐる、高等なる可き人類に粗暴な忿怒の情が存するものも、近い祖先を猿猴に有するからである。かく系統を遠く生物界に有する事は即ち現今の吾々を規定する所以である、若し吾人の性に不完全な不調和なものがあるなら罪は吾々が生物の後裔たる事にある、凡ての合理的な人生觀を現在の人性そのものゝ上に限る事は誤りである。吾々は



生物上の關係より人性の内容を知らねばならない、道德も哲學も人性のかゝる内容より出發す可きである。

#### 四 人性に存する不調和

##### I 消化器に存する不調和

吾々人類が遠く其起源を生物に有し、然も發展した頭腦と異なつた社會境遇とを有して爲、多くの器官は不用物となつて、只遺物として吾々に與へられて居る、而して是が吾々の生活に不調和を與へ、古來から人の惱むだ老病死の起因となる事が多いのである。先づ消化器に於ける不用器官を擧げて見る。

吾々が消化の爲に甚だ緊要だと思惟せられて居る齒は、吾々にとつて必ずしも絶對的に必要なものではない、猿に於てすら既に多少齒の退化を示して居る。

臼齒の如きは進化につれて其數を減ずる傾向がある、智齒の如きは無くとも咀嚼には何等の關係もない、然るに是等の齒が存する爲めに重患に陥る場合は往々にある。

次に消化器で不調和なのは盲腸及蠕蟲狀附屬物である、之は兎等の草食獸には甚だ發達して居るが人類にとつては全く不用物として殘留して居るばかりである、人體から此器官を除いても、健康には何等の害もなく盲腸なくして活きて居る人の例はいくらもある、然るに盲腸から起る病氣は屢々致命傷である、凡て發育不完の器官は多く先天的に抵抗力を缺いて居る故に、従つて疾病には犯され易く、かの恐る可き盲腸炎は、かくして此不調和なる器官あるが爲に起るのである。統計によれば僅かバリーの一病院で五年間に四百四十三人の盲腸炎患



者を收容した事を以てしても此附屬物が如何に多くの人に有害であるかは明かである。

然し消化器に存する不調和は嘗に之のみでない。食道の大部分を占めてる大腸の如きも、よしそれが發育不完の器官で無いにしても吾々にとつて必ずしも缺く可からざるものとは云へないのである、消化された物を吸収する點から云つても此器官は大した働きをして居ない、或女の人は大腸が萎縮して何等の働きもしないのに三十七年間も生きて居た。然らば何故哺乳動物に大腸がかく發達したかと云ふ事は、後章に細論する事として、兎も角人間にとつて此大腸の存在は却て有害なものと云ひ得るものである、大腸の中で醸される黴菌は甚だしいもので特に秘結の折は排泄物が此大腸に滯る爲に、腐敗して多くの黴菌を

生ぜしめるのである、その中で最も恐ろしいのは赤痢である、かゝる大なる器官が吾人の體内に存するが爲に古來幾萬の人は此厭ふ可き病氣に犯されて居る、更に又癌腫が此大腸に起る事は屢々で、人は此不用なる祖先の遺物を有するが爲に多くの場合吾々の生命を短かくしてゐるのである。

胃すらも人間にとつて絶對的に必要なものではない、然るに胃癌によつて生命を奪はれる人は非常に多い、治療の結果胃なくして生きてる人の例もある、只小腸さへあれば消化作用は充分であると云つていゝ。

野生する多くの動物は粗雑な食を取つてゐるが、發達した人類は調理の法を知つて、軟かい滋養物を食とする事が出来るから、嘗ては動物にとつて必要だつた消化器も人にとつてはしかく須要なものでない筈である。例へば糞蟲の如



く他人の消化した滋養物をとるものには全然消化器が缺けてゐる、然し人類にはかゝる進化は未だ起つてゐない、彼は巧みな調理の法を知り乍ら大腸、盲腸、胃、直腸を依然として持つて居る。

然も多くの動物は本能的に食物選擇の力を持つて居る、生物界に於ける調和の例として擧げた胡蜂の如きは、殊に特種の一定した昆蟲より食べない、蠶が只桑の葉をのみ食とする事は遍く知られて居る事である、然るに人類には此本能は甚だ不完全である、幼児が周圍にある何でも口に入れようとするのは人の知る處である、有害なる事を知らないで、食をとつて命を亡くした例は甚だ多  
5。

かく内には腐敗物を宿す大腸が黴菌を造る源となり、外からは飲酒、喫煙に

よつて自らを害毒して居る、此酒精中毒の結果は、明かに食物選擇の本能と自己保存の本能との間に調和を缺いて居る事を示して居る、かく消化器の多くが人性に有する不調和を示して居る、之によつて多く老病死を招いて居るのみならず、尙其不調和な器官は之のみに止まらないのである。

## II 生殖器に存する不調和

吾々は子孫を永續する爲に缺く可からざる生殖器官に於てすら不幸にして多くの不調和を見るのである。精密な研究によれば男女の生殖器は種々の起原を有して居るが大體に於て遠い起原を有するものと新に得たものとがある、其古  
い中に於て女の有す可き子宮や乳房腺が不完全な形に於て男にもある事は、遠  
遠たる兩性具有時代の痕跡を止めたものである、かく祖先の遺物として吾々が



生殖器に不調和なものを有して居ると同時に、高等猿類に於てすら無く、人類が新たに得た他の器官がある、それは即ち處女膜(Hymen)である、デニカーの研究に従へば人に似た猿の胎兒にも亦成長せるものにも此器官は全く無く、従つて此器官は最近に人類が女子の胎兒に得たものと見る可きである、然もこの膜は少くとも胎兒十九週間後でなければ發達したものとならないのである。

抑も器官を新に得る事は、それが人類にとつて緊要なものであり、且つそれが發達したものである事を豫想せしめる、キーデルシヤイムは此器官を未だ不完全のものだと云つてゐるが、此新に得た處女膜は女子にとつて如何なる效用があるのであらうか。此膜は處女たるの證となり屢々法廷に於て姦淫罪を慥かめるつてになつて居るが生理學上よりしても注意す可き問題である。

事實によれば此處女膜の破るゝ事は女子の體にとつて別に有害ではない、多くの人種に於て此器官を早くから除去する事さへ行はれてゐる、印度、ブラジル等では生れると直ちに此膜を取り去る爲に所謂處女なるものは居ないわけである。カムチャツカでは結婚するのに此膜がある事はいけない事として母が之を取り去る風習がある、フィリッピンでは以前此膜を除く官吏すらあつた、かかる事實は此人間にのみ存する新たに得た器官が生理上必要のない證據と見る可きである。只多くの人種間に此處女膜が醜なものとして卑しめられてゐるのに反して之を尊ぶのは基督教及回々教である、處女たる事が是等の教へに於て如何に貴ばれてゐるかは世人の知る處である。

然し此器官が直接生殖作用に必要でない事は明かなるのみならず此膜がある



爲に恐る可き病氣を起す事が往々ある、例へば黴菌をそこに宿して貧血を起す事がある、結婚後此膜が破れる爲に此貧血が直るのを見ても明かである、かく生殖作用には不必要であり又健康にとつて危険であるかゝる處女膜は、何故に吾人に與へられたのであらうか。

建て得可き假説によれば、現今の人に不必要な此器官は古代に於ては寧ろ必要であつたにちがひない、何故と云ふに古代に於ては甚しい早婚が行はれた爲の生殖器が未だ發達しない前に交接があつた、かゝる場合には管に此處女膜が防禦物であつたのみならず其媾合を完全ならしめたのである。故に古くは此膜は無理に破れる事なく、發育した器官を容れ能ふ迄漸次擴大していつたのである。

故に急激に破れる様になつたのは近世になつて起つた事である。

古代に行はれた早婚の例を擧げて見れば男は七歳より十歳迄、女は四歳より六歳迄の間に結婚する風俗がある、十七世紀の始め頃マダカスカルでは十歳より十二歳の間結婚する習慣があつた、現に英國では法律上十四歳以上とあるが、之は殆ど空文にしる古い風習を傳へたものと見ていゝ。

又此處女膜は交接によつて破れない場合もある、現今になつて婚姻期が甚だ後れてゐるのが早婚の行はれた古代には初産後尙此膜の存した場合が甚だ多く寧ろそれが普通であつたに相違ない。かく處女膜は最近に人類が得たものなるに拘はらず、今は何等の用もなく、却て一つの病原となる可き不調和な器官として存するばかりである。



生殖器に存する第二の大きな不調和は月經(Menstruation)である、抑も出血は病氣の徴候であるが特に肺、腸、腎臟又は子宮癌の折の出血等は恐る可き性質を有して居る、只茲に女子が時期を定めて百乃至六百グラムの出血をする事は生理上注意す可き現象である、他の動物にも起水の折は或は一種の液體を流出する事があるが只之に血の加はる事は殆ど稀である、然るに人の場合、生殖器から流出せられる此液は大部分は血である、故に此月經には何か新しい現象が起つたと見ねばならない。

而してかゝる出血の現象は恐らくは近く人間の生活状態が變化した結果によるものである、古代では男女の交接が早年に於て行はれた故に妊娠は月經以前にあつたのである、近時に於ても同じ例が報じられてある、要するに古代に於てはかゝる事が普通で、時を定めて出血する事は稀であつた様に思へる。古きヒンドゥーの民には特に此事があつたのである、サンスクリットの詩には、婚姻前に月經があつた娘を有する親は地獄に投げ入れられるので、もとより其娘は永劫人の妻となる事を許されずして憂き一生を送るのである。

然るに現代になつて社會状態の變化と共に結婚期は甚しく後れて來て居る、従つて月經を止める可き機會がなくて現今の状態に達したのである、之を昔の境遇に比すれば甚しい變化が起つたわけであるから出血する様な病理的現象を起すのではあるまいか、月經の際に多量な血を失ひ、然も苦みを伴なつて神經を強く刺激する事は、正當な健全な生涯と調和す可きものではない、多くの人種で此月經期の娘を不淨な者としてゐるのも理がある、ヒンドゥーの民は月經



のあつた第一日を穢多の日と云ひ二日目を佛陀の殺人者と呼んでゐる、或地方では月経期の娘の髪は蛇に變じると信じられ、又惡の神とした處もある。兎も角かゝる娘が男に近づく事さへ禁じられて、月経を卑しむ精神は地上至る所にあるが、之は一方に於ては生理上、病理上な異常な現象たる事を暗に説明して居る、吾々は此月経に於ける多量の出血を生殖器に有する一つの大きな不調和と認めざるを得ない。

次に生殖上の第三の不調和と見らる可きは生殖成熟期(Puberty)と可婚期(Marriability)との不調和である、出血が人體にとつて不調和なる如く分娩の際の苦痛は又最も不調和なものとなはねばならない、事實に従へば分娩時の苦痛は年若き程少ないのである、一例を挙げれば十二歳の時に初産をした女があつたが出

産する爲に僅か十五分を要したばかりで然も痛みは殆どなかつたのである、只茲に注意す可きはかく早年に於て出産した母は其折に苦痛少ないに拘はらず死ぬものが比較的多い事である、ハッセンシュイタンの報告によればアブシニアに於ては早年に於て分娩した母の三十パーセントは死ぬと云つてゐる、而して此死を導く原因は全く體が充分に發達せず尻骨盤等が固まつて居ない前に結婚するのに基づくからである、英國の有名な外科醫者のダンキヤンの精密な考察によれば分娩の際の死亡數よりして、女子の可婚期の最も適した年齢は二十歳より二十四歳迄の間である、換言すれば、其年齢が分娩の際又は分娩の結果として死亡する場合の最小を示すものとして居る。

以上の事實は明かに生殖成熟期と、肉體成熟期即ち可婚期との間に不調和の



ある事を示して居る、即ち分娩の苦痛少ない時期は肉體の完全なる發育を缺き、肉體の成熟した可婚期は、甚しい苦痛を伴なうのである、換言すれば分娩時の苦痛よりすれば早婚がよく體質よりすれば、早婚は死亡率を増すわけである。

第四に生殖上の不調和と見る可きは生殖成熟期と性慾との關係である、即ち生殖器官の成熟期と性慾とが時期を共にしない事である、幼き小兒が未だ生殖器官の完全に發育しない前に屢々戀情を起す事は吾々の知る處である。かのダンテは九歳の折ベアトリスを戀し、カノーバは六歳にして戀に悩み、バイロンは七歳の時マリー・ダフを想ひそめた、搖籃にある幼兒すら時として女子に對して性慾の衝動を現はす場合が往々ある。

かゝる生殖成熟期と性慾との不調和は遍く小兒の間に行はれる手姪 (Onani-

sm)の原因となつて居る、手姪は嘗て「最も不自然なる性慾の自個満足」として認められて居るが、かゝる不調和のある人間の性其ものより來る避け難い自然の結果である、従つて手姪は與へられたる人性の不調和と認める事は出来るが、之を不自然なものとして直ちに罪惡と見る考へは誤りである。手姪は男兒に於ては最も普通な現象であるが、女子に於ては不定で然も性慾の起る期が後れてゐる、然し或人種では女兒の手姪は最も通例で或處では公の會話になつてゐる風習もある、然し多くの場合手姪は惡として恥かしい事として匿れて行はれてゐる、今迄多くの教育家によつて手姪は最も不自然な行爲として、罪名のもとに健康を害し智力を乏しくし一生に不幸を來す基として卑しめられて居るが、幸に過度ならざる限り、かゝる憂ふ可き結果を惹起する事は稀であり、それは不自然



なる罪惡に非ずして、人性そのものより來る痛ましい自然の不調和と云はねばならぬ。

かく性慾の發動が、精蟲の成熟期より遙に早く起る事は大きな不調和であるが、等しく其官能が衰へた後に於ても強い性慾を起す事がある、精蟲は人の生涯の大部分は其能力を保持して、ごく老年の人に迄多くの精蟲が存して居る場合もあるが、其官能が衰頽した後も尙性慾の起る事は又不調和な現象と云ふ可きである、かのゲーテが年老ひて尙戀に活き、ユーゴーが齡たけて戀情に悩み、近くイブセンが少女バルダツハに想ひ煩つた事はよき例である。

之を多くの植物の完全な生殖作用に比較すると其差違は甚だしいものと云はねばならない、彼等は程よい折に花を開いて香ある液を出して蟲を集める、集

まつた蟲は蜜に酔ひつゝ花粉をつけて他の花を訪れる、かくて生殖作用が達せらるゝや花は綻び香は消えて豊かな實を結ぶのである、蟲は既に食を蓄へ一夏の働きを終えて又花を訪れないのである、進化せる人類は不幸にも尙是等花と蟲の如く完全なる生殖作用をなし得ないのである。

加之社會状態が複雑になるにつれて正當な婚姻期を得る事は益々困難になりつゝある、子を養ふ程の力を得る事は今の世に於てはしかく容易でない爲、婚姻の年齢が漸次後れて行く事は統計の示す處である、不順な社會境遇に妨げられて圓滿な性慾を得られず、且つ人性そのものに基くかゝる多くの不調和はやがて幾多の性慾上の紊亂を來すのである、性慾を卑しきものと見た思想は既に古りたのである、かくてそこより起る問題を凡て罪惡として苛酷な判きを下す思



想は古りねばならない、性慾上の紊亂は深い根原を吾々の性そのもの、中に存し、今の人にとりては寧ろ必然に起る可き現象である、人性の不調和なる事實を忘れて、單に道德宗教の批判を以て、ひとへに之を卑しとする者は誤りと云はねばならぬ。

### III 種屬保存の本能に存する不調和

かく吾々は多くの不調和を生殖器官に有して居るが、例へば手姪の如きは尙他の動物にも屢々見る事實である、只生殖問題に關係して人間にのみ存して決して他の動物にない現象は人工的に妊娠を不可能にする事である、人は此不妊の目的を達する爲に幾多の手段を用ひて居る、プロスの「婦人」と題する書には特に此點に關して委しい例が擧げてある、彼によれば墮胎は此地上殆ど至る處

に存する事で、彼等の間には二人三人の數より以上の子を有する事は許されな  
いで其他は凡て墮胎せしめる風習のある處もある、印度、亞弗利加等はかゝる習  
慣は普通で歐米に於ても或程度迄之が公にせられてある、土耳其の如きは胎兒  
を五ヶ月迄は生きてゐる者と認めてない、千八百七十二年コンスタンチノーブ  
ルで墮胎の故を以て法庭に出たものが十ヶ月間に三千人以上あつたとの事であ  
る、私生兒の比較的少ない事は寧ろ驚く可き事ではなく、文明國に於ける出産  
は主としてかゝる方法によつて制限せられてある、十八世紀の頃はカムチャ  
ツカの土民は、婚姻は單に性慾の満足の爲で子孫を得る爲ではなく懐妊すると  
藥料を用ひたり又道具によつて殘忍な手術をさへ行つた。

然し此墮胎に反對した國民も古來幾多あつた、ペルシヤ、ユダヤの如きは其